工ト 2B-62

曲亭馬琴遺稿　　坦菴幹校

壬戌

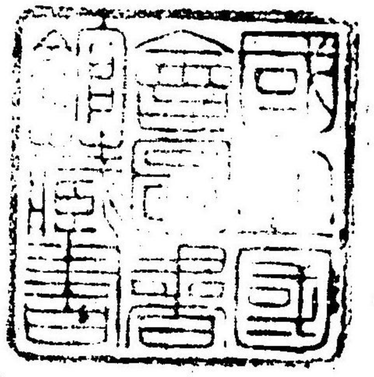
羇旅漫録 全

一名馬琴道中記

川邊花陵
渡邊小華　圖畫

畏三堂梓

915.5 Ta624k



337616

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

壬申春ね　曲亭主人書

くれ竹のせまきふしどに絲さめをかこちしも。さへの神ゝや誘れなん。うみかせの伊勢の宮居おかまんと。さみだるゝ頃杖よ笠よと立さわつゝ。するが路や不二のなうめゝうあじさるゝ。とをつゐふみゝ旅やどをして。まだ夏ながら秋葉の山ゝよちのぼれど。ふる郷人ゝをつけん。なつうゝ鳥の啼ゝさへ志のぼれ。三河もよし田おう崎や。むかさ況麥の杜若ゐふひなかせしさ月をすぐし。山どりの尾むりのくにゝ長況旅絲をなぐさめ。星まつるは

もめよりみやこまゐぼも杖をとゞめて。殘る所つ
きぜかも河はうち流も。ひがし山の夕にく日。あう
ゑさに赤きへたれ色まくあ夕ゑぼ。なまは人まま
たるゝ身のこゝ濃いそく。伏見のよふゑゆめにて
がせつ。うゆのうた葉のあしやすめもて。三ぢのな
あめも所ああくに。うにものさびき秋風まおとる
うれ。たつとしいへが源まくら。堀江の月の秋をこ
うつ。ゆふべはえしの角もしや。いせ寺まいれいつ
ると弓。たけの都のみやこゐをおかみ。山田松さか

のれどり目まぬぢふらしく。津の町のながきよにが
ら。伏所のうしたる。ひやうたんゑよりはしり出て駒
のはづなをはやめつゝ。桑名の宿のはまくりを。所
へべにくうらぬ友人まとゞめられ。三日雨ふり風
ふれて。宮ぶ縁ゆきれをのなれど。さやへまゆり玉
けがもぜず。ち日まぢきていそぐ程ま。葉月廿日
所まりよかの日。おのが家路まさどりにきぬ。さび
ま所そぶを百日所まり。めに見みゝまきをるとま
めやうまかいぢをみれば。ぢひまゆ、のゝ本とあれ

り。されどさえ拙くおもひさらされ、ば。おのれめでさしとおもひしをも。人もさ見るまたえざるべく。書あつめたるふみの中まれ。ち祢阿をび何くれとなくたれれさるをおほければ。のこし空ゞめてこがうまでは見れべきをしへもなし。やがて紙屑籠（カミクズ）てふものにおし入れて。ほでうふ翁に阿さへんとしけるを。阿る人ちひてとゞめたるまゝ。ちばしふるほゞゝの底ふたけりとなしぬ。もしかしるを世まあくゞかのちみといふむものはゝこやはちすが

もあらじうし

著作堂馬琴

旅泊槩略

享和二年壬戌、夏五月九日已ノ刻、江戸出立、今夜神奈川泊この処まで京傳子送らる、明朝袂を分つ、○十日大磯泊○十一日箱根塔の澤今日雨ふる、元湯彌五兵衛を訪ふに、此節川越の城主入湯ましますもて、塔の澤の湯屋寸地も人を容るゝの席あし、故に酒樓中村屋東五郎が家ゝ逗留す、今夕僕又助江戸より來れり、○十三日今朝雨少しくふる、晝より晴たり、箱根を越ゆ、沼津泊○十四日江尻泊○十五日府中駿河人ゝとめられて、二十日まで逗留す、○廿日島田泊この節霖雨にして大井川猶あかず、因幡屋何某叮嚀にもてなさる、○廿二日金谷泊今夕川を越たり、故に僅ゝして泊る、○廿三日掛川泊廿五日早朝秋葉へ出立、廿六日の夜又かけ川へ歸る、廿八日まで逗留、○廿八日袋井泊今日午時掛川を立て、袋井の完醉を訪ふゝ留守なり、すぐゝ過るべかりしを、妻女ねんごろゝとめらるゝを以て、やむことを得ずして一宿す、掛川の雪松氏この所まで送り來り、今夕袂を分てり、掛川に遊る時、廿五日の朝僕又助をパ

その故郷舞坂の在へやりぬ、故に一兩日獨行す、○晦日吉田今日僕かへり來れり、これと濱松よりあふ、○六月七日岡崎泊今朝吉田を出立、御油の外成といふ人にとめられ暫らく休息この夕岡崎へ至る、○十一日新堀泊よひ堀ハをか崎より一里半ばかり西の方の在なり、○十二日名古屋泊今朝新堀を立て名古屋へ至り、同廿六日まで逗留、この間十四日津島の友を訪ふて津島祭を見る、おなじく十六日午時又名古屋へ歸る、昨日僕又助を江戸へ歸す、是より獨行、供あれバ逗留中万事ゝづらハしきゆゑなり、○廿六日宮泊今晩名古屋を出立、名古屋の友人大勢送り來る、又宮の雅人一兩輩來會し終夜飲醼せ、明朝乘船これと袂をゝかつ、○廿七日石藥師泊今日大よ雨ふる、○廿八日水口泊出水につき、七月朔日まで空しく逗留、○七月二日石部泊草津大水、道あれて通行なし、故に石部に泊る、○三日京都今日間道を經て大津より出づ、この間甚難澁、おなじく廿四日まで京にあり、○廿四日夜大坂今日京を立て伏見より乘船、戌の刻道頓堀へ着岸、○八月六日京都昨夜大坂を出立、友人舟場まで送らる、夜中大雨、六日の朝伏見より着岸、今日も風雨甚し、先の大水にこりて大津へ出ず、又京へ行て晴をまつ、○

八日水口泊今朝京を出立、○九日津泊、○十日松坂泊、○十一日參宮今夕松坂までゝへ、○十二日津泊、○十三日桑名泊十四日雨ふりて舟出す、桑名人よとゞめられて一兩日逗留す、○十六日名古屋今朝乘船、佐屋へまハる、桑名の架橋佐屋まで送らる、佐屋の本陣丁寧よもてなさる、故よ濱ばらく逗留、今夜名古屋に至る、○十七日赤坂今朝名古屋を出立、歸心甚あるゆゑ、故よ是より一日に十二三里の道をはしる、○十八日濱松泊、○十九日島田泊、○廿日興津泊、○廿一日三島泊、○廿二日大磯泊、○廿三日川崎泊、○廿四日江戸今朝巳ノ刻品川へ來る、道よ僕よあへり、家内の無事を聞て道をいそがず、未ノ刻家よ歸る、

凡道中百有五日五月九日より八月廿四日よ至る

逗留の日數

塔の澤二日　府中六日　島田二日　掛川五日半　吉田七日　新堀一日　名古屋前後十七日　水口三日　石部一日　京都前後廿四日　大坂十日　伊勢妙見町一日　都合逗留七十五日半

崖言

一遊歴中おのが目よ珍らしとおもへるもの。悉くこれをしるす。古人の略傳○墓誌○珍書○風俗の異體○方言○妓院○雑劇○年中行事の異同○名所古迹○古人の墨跡等あり。序を得ず一覽せずといへども。その

處を探得さる。古墳等は出るせるもあり

一岐阜長良川の鵜船。愛宕。高尾。四明山石川翁の舊跡石山寺。二見。朝隈。三保等は。必見るべき所といへども。或は道遠く。或は山高くして。炎暑よさへず。或は案内の友人當日故障ありて。もたせるもありて遊覽せず。故よあるすとあさいず。遺恨甚し。就中ながら川の鵜。十八樓。四明山を見殘せるを尤うらむべし。

一南都は歸路必遊覽すべきを。出水よ日數おくれて。歸心あさ〻しく。且路あれて獨行の覺束あさよ。ゆか

でやみぬ。播州高砂。紀州高野。攝州須磨。赤石等。僅の道を隔あがらゆかず。是洪水ゑ路次の序を失ふ故あり。西は住吉を限れり。

一遊歷中人の需ゑ應じて作れる狂文等數稿ありといへども。こゝゑ載せずして別本とす。見るゑ己づらはしき故あり。旅中漫戯の詩歌は。その所を得てちみ出せるものこれを載す。是みづから後勘ゑ備ん爲ゑしてゐいとをさおきことのみおほかり

一此書人ゑ見せん爲ゑもせず。又みづから長夜の友とし

もあら祢ど。老後茶話の記臆ゑ。おぼらく駄賃帳のまりへゑまるせり。机上の鷄肋かゝることゑ猶おほかるべし。

目錄

○一條ゑり三十九條までの話ゝ。東海道大磯より大津までのこと沈記。名古屋新堀又この中ゑあり
○四十條より八十七條ゑ至て。京師の話をまるす。類沈もてあらべ評するゑ至てゝ。大坂の話もこれ沈混ず。

近江も亦この中にあり

○八十八條より百廿五條に至て。大坂の話をまるす。京の話を雙評すること前のごとし

○百廿六條より百五十七條にいたりて。伊勢及び歸路の話をまるに

巻の上

〔一〕大磯の懐古
〔二〕貌姑蜂の雨
〔三〕雨中の不二
〔四〕農男附龍華寺
〔五〕正雪が墳附十三佛
〔六〕梅屋勘兵衛が舊趾
〔七〕義元の像
〔八〕駿府二町街
〔九〕宇都の山
〔十〕島田の川留
〔十一〕小夜の中山
〔十二〕紅毛人の墓
〔十三〕來舶人の歌曲
〔十四〕掛川の好事家
〔十五〕秋葉の山
〔十六〕戸守の鍾馗
〔十七〕遠州訛
〔十八〕吉田の花火
〔十九〕吉田のめ〜盛附衒妻
〔二十〕岡崎の出女
〔廿一〕吉田岡崎の妓樓
〔廿二〕とか崎の夏芝居

〔廿三〕五綵の山水
〔廿五〕名古屋の風俗
〔廿七〕甚目寺の鐘
〔廿九〕名古屋の芝居
〔三十一〕津島の挑灯船
〔三十三〕江州の大水附攝河大水の噂
〔三十五〕瀬田蜆
〔三十七〕三上山附百足山
〔三十九〕奴茶屋

巻の中

〔四十一〕光廣卿の寛活
〔四十三〕六條郭の全盛
〔四十五〕烟花城書畫展覧目錄
〔四十七〕島原の噂
〔四十九〕祇園さし紙
〔五十一〕きがへの譯
〔五十三〕舞子の評
〔五十五〕妓の衣服
〔五十七〕京の女兒風俗
〔五十九〕祇園の方言
〔六十一〕御所うら
〔六十三〕總嫁
〔六十五〕京師の評附風俗の圖說
〔六十七〕旅の盈附大文字の火
〔廿四〕名古屋訛
〔廿六〕名古屋の評判
〔廿八〕繪巻物附水滸後傳の目錄
〔三十〕名古屋の天王祭
〔三十二〕薫み香の物
〔三十四〕粟津の義仲寺
〔三十六〕鏡山
〔三十八〕三井の古鐘
〔四十〕遊女八千代が噂
〔四十二〕板倉侯の大量
〔四十四〕傾城局の券書
〔四十六〕遊女吉野が傳附蟹の盃
〔四十八〕京師の妓院
〔五十〕嫖客の噂
〔五十二〕藝子の枕金
〔五十四〕三絃笛
〔五十六〕妓樓の夜具
〔五十八〕祇園大樓の噂
〔六十〕祇園の歌曲
〔六十二〕つくしわた
〔六十四〕四條の芝居
〔六十六〕太秦の草紙
〔六十八〕六道の槇うり

〔六十九〕去らいど
〔七十一〕内裡の御燈籠
〔七十三〕せんず萬歳
〔七十五〕地蟲まつり
〔七十七〕河原のすゞみ
〔七十九〕洛外の古迹附近江八景
〔八十一〕京市中の喪附名古屋伏見附伊勢尾張
〔八十三〕女子のぼうし
〔八十五〕京師の人物
〔八十七〕應舉が臥猪
〔同〕淀の洪水撞木町の噂
〔八十九〕双の小万が傳
〔七十〕京の盆祭
〔七十二〕りうたう太
〔七十四〕京の七夕祭
〔七十六〕京地の酒樓
〔七十八〕京都の節儉
〔八十〕かし家の札
〔八十二〕女兒の立小便
〔八十四〕粟田の陶器
〔八十六〕嘘談の名人
〔同〕京の浮世繪附澤庵の書賛
〔八十八〕八文字屋自笑が噂附其碩
〔九十〕近松門左衛門が傳附墨跡

〔九十一〕西鶴が墓誌
〔九十三〕美濃屋三勝が墓附評
〔九十五〕紙屋治兵衛が噂
〔九十七〕乞丐女六が墓附評

巻の下

〔九十九〕契冲阿闍梨墓誌
〔百一〕元和戰死の古墳
〔百三〕鬼貫り傳附評
〔百五〕難波雀の抄書附西鶴名殘の友
〔百七〕松明の施行
〔百九上〕太夫天神のかし借り
〔百十〕俳優作レ衒
〔九十二〕椀久奉納の手水鉢
〔九十四〕遊女夕霧が墓附評
〔九十六〕淀屋辰五郎奉納手水鉢の噂
〔九十八〕二代目義太夫が墓附元祖義太夫略傳
〔百〕家隆卿の碑附貞柳碑の噂
〔百二〕紹鷗が墓附千家の墓の噂
〔百四〕大坂市中の總評
〔百六〕住吉附難波屋の松小町茶屋
〔百八〕浪花妓院の噂
〔百九下〕伯人の評
〔百十一〕難波新地

〔百十二〕難波堀江附堀江さゝ紙
〔百十四〕女子の評
〔百十六〕妓楼混雑劇
〔百十七下〕幇間京もならべ評す
〔百十九〕吾雀が噂附幇間亦助が噂
〔百廿一〕とさやらふ
〔百廿三〕京大坂商家の評
〔百廿五〕伏見の夜泊
〔百廿七〕山田の客舎附間の山
〔百廿九〕古市芝居の噂附一身田及堤世古の噂
〔百三十一〕坂和田喜六が墨跡
〔百三十三〕其角が自讃の評
〔百十三〕大阪妓院の方言
〔百十五〕堀江の藝子
〔百十七上〕浪速のめりやす
〔百十八〕首のぶが傳
〔百廿〕總嫁
〔百廿二〕妾奉公人引札の噂
〔百廿四〕道頓堀の芝居
〔百廿六〕伊勢路の居風爐
〔百廿八〕古市の總評
〔百三十〕大平が噂
〔百三十二〕道のべの樓
〔百三十四〕伊勢の好事家附人物の評

〔百三十五〕筆捨山
〔百三十七〕桑名の歌曲
〔百三十九〕一目連
〔百四十一〕名古屋の十五夜
〔百四十三〕はせをの發句塚
〔百四十五〕かもうり
〔百四十七〕東海道の噂
〔百四十九〕大井川
〔百五十一〕箱根東福寺の釜
〔百五十三〕平越の富士
〔百五十五〕大磯の戯咲歌
〔百五十七〕歸庵の祝章
〔百三十六〕桑名の秋雨
〔百三十八〕桑名市中の喪
〔百四十〕佐屋廻
〔百四十二〕藤川の夜行
〔百四十四〕うらころも
〔百四十六〕濱松の夜雨
〔百四十八〕薩陀山
〔百五十〕喜瀬川の大水
〔百五十二〕さいの河原の懐舊
〔百五十四〕名馬の足跡
〔百五十六〕遊行忌の群集
〔附錄〕旅中自戒十五箇條

京傳名は醒字は酉星岩瀬氏通稱を傳藏と云り京橋のほとりに住するをもて自から京傳と號す翁と莫逆の友なりしゆゑ神奈川まて送りしならん京傳は文化丙子九月

壬戌羇旅漫錄卷の上

坦庵居士正幹校

簑笠漁隱遺稿

(一) 大磯の懷古

五月十日大磯の驛に泊る。きのふ用事ありて僕をば品川よりかへし。今朝京傳子には神奈川まて別る。こゝろいまだ旅になれず。このゆふべ甚だ寂寥。鳴立澤もむかしの地にあらず。虎が石もたよく人の去るところなればさるさゞ

祐成全盛大磯傳。千里高名虎御前。可嘆衣裳群乳鳥。只今有出女如鳶。

(二) 藐姑峰の雨

十二日のあした。藐姑峰をとゆ。今朝雨ふれり

箱根八里上沈汗。騎馬越來行路安却懼。昨今皐月雨。明朝大井水漫漫

五十六歳よてみまかりぬ

此條ハ先版簑笠雨談に出たれバ省くべかりしを翁當日の吟にちなみて圖さへ追加してみせしてこゝに錄するも也以下雨談にのせたるものゝ悉くこれを省きぬ

十日の夜より雨ふりて。三島。沼津。原。よし原。岩淵。薩陀山の間。一日も富士を見ず。府中逗留の間もまた士峯を賞するにより〜なし〜

われに句なし〜山よ不二なし〜五月雨

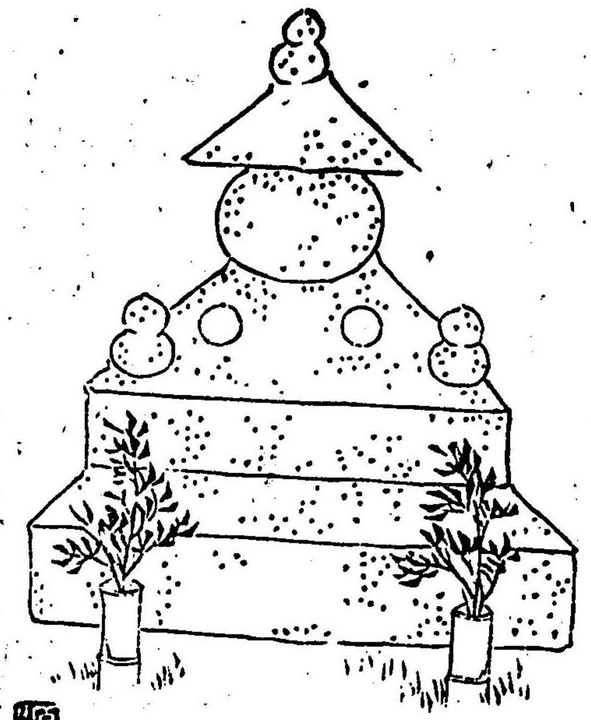
〔四〕農男附龍華寺

駿府の人の説よ。富士にて四五月のころ。だん〳〵雪のきえのこりたるが。寶永山の方凹ところよ。人の形のごとく雪のこることあり。これを農男と稱す。この殘雪見ゆるとしもあり。また見えざるとしもあり。田子の土人いふ。農男見ゆる年ハ必ず五穀熟す

凡士峰の眺望天下第一と稱するもの。駿州有渡郡大野村府中ヨリ三里龍華寺の本堂より。富士を正面に見る。最絶景なり。清見寺よまされりといふ。連日雨ふりけれ。ゆかずしてやみぬ。

〔五〕正雪か墳附十三佛

駿府寺町菩提寺墓門右のかたに由井正雪が墓あり。



かたちかくの如し五輪も中ハなくなりたりとみゆ高サ三尺五六寸もあるべし墓誌年月ハ賊首たるをもてをるさゞるよや花ハあらたよ建てありこハ寺より手向るよや

又彌勒寺ハ十三佛あり。府中より西廿町許今ハ地名とありて。彌勒の十三佛と唱ふ。これも正雪が菩提の爲に。宮城野ゑのぶが建しといふ。土人の說なり。

こゝにも正雪が墓あり。尋常の石碑のごとし。宮城の信夫ハ赤生の人なりこの女たらかからの事うたがふべし。

〔六〕梅屋勘兵衛が舊跡此條雨談ニ出したれば省く

〔七〕義元の畫像

駿州阿部郡大岩村臨濟寺瑕機山の向ニ今川義元の畫像あり。束帶持笏五月十九日義元忌日諸人に拜さしむ。此日雨ふりければ予參らず

〔八〕駿府二丁街

駿河府中の妓院ハ二丁町とよびなす。本名ハ阿倍川町なり。神祖御在城の日。免許の遊女町なり。今ハ大ニおとろへたり。見世ハ。よこ見せまゝに。故に格子の方ニハ障子を建てたり。嫖客暖簾をあげて。ほしいまゝに內ニ入り。簾のかたより見たてるあり。ゆゑに妓みなまがきの方を正面ニ居るこれをヨコミセといふ樓上もせまくまたむさくろし。ざしき持部屋もちと稱

するもの。江戸よし原のにゝ河岸よれとれり。客一人あればその友あとよりゆきてそのざしきよ入りて。ほしいまゝよあそぶよ妓をまねかず九ッをかぞりよこの人〳〵ハかへるなり。これをつけよゆくといふ。妓の詞何ぞあんゝ。おいでなんし。あどいふ言葉をつかへど。多くハ駿河あまりをまじへたれば絶倒すること多し。妓の詞よ文といはず手がみといふなり。こんや手がみ一本かゝアずなどいふ。かゝアずハ。かくべゝといふなり。妓何さんちつくりれいでなんゝよ。客今よいかず〳〵。いかずハゆくべしなり。硯蓋などむさくろゝ。藝子もあれど。是亦似て非ゐるものなり。牽頭ハ郭中の米屋酒屋のわかいもの。又ハ郭の門番などの孫兒なり。故に酒長酒屋の門忠門ばんのなどの名あり。この者夜ハ奉公のいとまあるとも。て。幇間をして。酒のみ小遣錢をもとむるの計をなす。幇間ハ羽織を言語形態。胡蘆するよ堪たりず。甚いやなるものなり。二丁町の細見記ハ安永九年の春

千代むすこ

よしのや酒樂といふものはじめてえらみて免行すそのゝち終よ行れず前後一版なり。予一本を得てたづさへかへれり

〔九〕宇都の山

宇都の山の十團子ハ。豆粒ほどの餌を。麻糸もて十づゝつらぬき。五連を一トゐけとす。土人の說に。峠よ地藏菩薩のたゝせ給ふ。このみほとけの夢想よりて。十團子を製し小兒よ服さしむれば。万病癒といふ團子の數珠よ擬するよやその製もまたふるゝ

旅駕よのれバつふりをうつの山うつゝよもめのあハぬなりけり

〔十〕島田の川留

連日の雨に大井川往來なけれバ。岡部より島田の間よ。諸侯みちゝゝて。いとよぎはへり。予ハ二十日の夕島田に入る。予が宿れる因幡屋てふ家も森侯の本陣となりぬ。この家旅店よあらねど。富るものなれバかくの如し。よりて因幡屋の向ひ。何がし源六とかいへる商人の家よ逗留す。時

くの飲食ハ因幡屋より持來りて饗應しぬ。夜中驛中の繁昌小人の小うたなど。云ばらく江戸ゟ在るが如し。川ハ十五日より廿二日ゟいたりてはじめて明ぬ。

妹がゆふ島田の驛にとめられてゝみへゆきゝのとかぬぞうき

〔十一〕小夜の中山

遠州小夜の中山夜泣の石ハ。日坂より十七八町ばかりひがし。山の往還にあり。無間山ハ街道より一里半なり。掛川の驛はづれより右のかたにみゆ。こゝより見れバはゝはだかしし

新坂、蕨猿兒有飴由來傳世夜啼碑。鯨音斷絶無間事。大士方便垂大慈子育觀音小夜の峠久圓寺ゟあり。淡ケ嶽阿波手の神社。無間山觀音寺にあり

〔十二〕紅毛人の墓 雨談ゟ出たれバ省く

〔十三〕來舶人の歌曲 上ゟ同し

〔十四〕掛川の好事家

掛川下復町の大場氏通稱大助松風亭と號すハ。遠州第一の好事家あり。近來名家の書畫をたくはふると數百張。又よく客に待す。所藏の書畫中に。堂上方の寄合書。國學和歌者流の寄合書。儒者詩人書家畫工のより合書等あり。いづれも名家のみをあつめたり。古人の墨跡ハ猶もとめやすし。僅の扇面へ大家數十人のより合書あるとハ。尤も志をはこぶこと厚からざれバ得がたし。その弟を闌陵といふ。通稱忠藏畫をよくす。この人を京江戸大坂伊勢へいだして書畫をもとめしむ。一國逗留半年に及へりとぞ。およそ三年ゟしていまだ盡さずといふ。田舍ゟハめつらしき人物なり

〔十五〕秋葉の山

秋葉山ハ掛川より麓まで九里あり。五十町壹里あり。山中又五十町あり。

奈良の道、守驛より兩路あり一ハ山越よりして甚だ難處なり。一ハ平地ありといへども川多し。四十八瀬といふ。予ひとつ〳〵かぞへたるよ二十七瀬あり。霖雨の後ハ五十瀬にもなるといふ。夏日ハ橋なし。故にこの川をとを〳〵く歩わたりにす。又道中食物乏しいぬゐの旅店いまハ大よ衰て。麓に數軒の旅店あり。甚奇麗なり。山中よりかゝる旅店あるやとめをおどろかすばかりなり。秋葉山中一町一町よりしるしの塚あり。杉の木立宮のつくり。江戸の王子の社邊よ似たる所あり。駿州より尾州までハ。驛の十字街。或ハ街道みな悉秋葉の常夜燈あり。この社近年もつとも繁昌なり。

いろはにほへとほつあふみや假名の數四十八瀬も越ていつ京夏
ながら麥の秋葉も過がてよ山路ハ蟬のしぐれ初よき

〔十六〕 戸守ろ鐘楯

遠州より三州のあひだ。人家の戸守ハこと〳〵く鐘楯なり。かたハらに山伏某と名をしるしたるもあり。鐘楯のこと愚按ありてゝに贅せず

〔十七〕 遠州訛

遠州より西ハ。半元服の娘多し。白齒のむすめハたえてなし。ゆくべきをゆかず。くらふべきをくハずなど。ずの字をうへていふを。駿州より尾州のあひだみなしかり。就中遠州人。ずが多し

〔十八〕 吉田の花火

三州吉田の天王まつりハ六月十五日。今夜の花火天下第一と稱す。大筒と稱するもの立物と二本。筒の周圍數十尺。たかく櫓を組てこれを居ゆその外種々の花火あり。大筒の資料ハ例年城れの〳〵棧敷をかまへて主よりこれを出さるこれを見る。又近國よりも見物よ來るものあり。鍛治町のうら通りよはは杉の木をうゑ。囃子神樂あり。花火ハ市中よてあげるなり。この夜屋上或

ハ簀子の下ヨ火こぼれかゝりたりとも。火難のうれひあゝ。是氏神の加護によるといひつたへたり

牛頭天王の社神明。八幡。ともヨ吉田城内ヨあり。六月十五日天王まつり。前夜十四日花火あり。本町。上傳馬町の兩町にて揚る。高さ十三間。巾三間これを立物といふこれ過て大花火あり。火のうつらぬやうに大釜を覆ひよす。これに火をうつす時ハ。うの火屋上ヨむらがり下る見物の人々はぬれ莚をのつぐ。その外町々の花火數百あり

十五日よし田五ケの寺院より飾山を出す。至てさとびて古雅なり。十四五の童賴朝に扮て。金の立烏帽子直垂太刀を佩く馬上なり。賴朝の乳母といふものあり。綿帽子緋のはかま馬上これヨしたがふ。また十六人の殿原とて。柿の素袍ヨかけ烏帽子これにしたがふ。城内ヨて走馬あり。中ヨ重忠と名告るものあり。此左右にあみ笠浴衣を被たるもの二人まんぢうを數百ふくろヨ入れ。これを笹ヨもひつけてこれにしたがふ。かの重忠ハ騎射笠錦の陣羽織背に幣をさし領主の棧鋪の前ヨいたり。馬上ヨて禮をなして。ふくろのまんぢうを投る。これヨあたるを吉事とす。また笹をとりといふあり。大太鼓一人。小太鼓二人同衣裳にぬりかさをいたゞき。覆面。ヨしきの陣羽織小手脚當あり。はやしハあみがさゆかたを着しさらヨ挑ちんをつけて同音ヨうたふ

「天王ハ何佛ヨてまします日本一のあら神あらねはし本鹽見坂名所々々のはなを見さいな」これをくりかへしうたふなり

〔十九〕吉田の飯盛附衒妻

よし田のめし盛。夏ハ越後ちゞみヨおなじ縞の前垂をかけ手ヨ團扇をもちて夜行す。よし田岡崎とも。妓ハことゞく伊勢より來たるものなり。ゆゑヨ妓ばかり伊勢訛りなり。妓席上にて三絃を鳴すヨ。かむろだち

「田をゝ崎の妓の髪かゝのごとし」是伊勢ヵ風ゝり土地の女たゝあとたゞり伊勢人の妻娘も大ゝこれゝゝ

「ゝ山をまゝ
だゝゝゝとた
ゝけるゝ
ゝり是京と
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ伊勢ゝ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ

伊勢の島田髷ゝかたち江戸にちかゝ京ゝこれゝ異ゝりかみゝいづれも水がみ也ゝかゝいせゝまげゝ斗油を多くつける也京ゝまげゝもつけず

などうたふことあり絶倒するに絶たり。今切のゝたしを經て西ゝ人物その外江戸よりあらず。京よりあらず。中國の風姿こゝゝ於て見るべし。土地の婦人ゝかならずしも美あらず。商家の衒妻などを見れゝ黒暗天女の如し

〔二十〕岡崎の出女

をゝ崎の妓ゝ齒を染るをならざりしが近年もるされて齒を染るなり。芝居などへも見物にゆくとあらざりしがこれも今ゝゆるされたり。妓の風俗よし田ゝ異なるをもし。妓夜行ずる時ゝ夏ゝふるき浴衣冬ゝ布子などをはをりてありくあり。もと絹布を着べきものならぬゆゑかくのごとし。但諸侯の旅館ゝ參る時のみはれて美服ゝて夜行す

〔廿一〕よし田をゝ崎の妓樓附矢矧はし

よし田をゝ崎四日市などみなめしもりをかりゝやり。ことゝくよび

よせて見たてるなり。客あるものも必ず來る。妓は一軒より一人をもるさ
人抱るとをもるさげ妓なき旅店は妓ある家より月々資料をにくるとる一軒二人ある家あり三
いふもるる大樓は妓一人をとくなりよし田をかさき一驛の妓百余人
りこんやは都合がわるいといふをつもりかわるいといふ。よし田岡
ざきより西。伊勢の妓樓をなおなじ京都祇園よりは誰さんはなりませ
ぬといふ大坂新町よりは。誰さんはあけでござりますといふ。とかざき
ちようじ屋の八重といふめしもり。少しく顔色美なり。ひようばん價よ
りたかし

矢矧橋長さ二百八間やなぎ川やなぎの里のひがしよあり。水源木曾の
山溪より落て末は鷲塚川といふ。西尾にいたりて二流海よ入る。矢はぎ
男川とよ川の三大河あるをもて國を三河と名つく

〔廿二〕 をか崎の夏芝居

とか崎六地藏といふところにて。土用芝居を見たり。よし簀張よして二

階樓鋪なし。中山來助その外中芝居の俳優なり。九人の外客ある妓も客
と同席にて見物することあたはず。狂言はざま合戰と五人切にてあ
りし。萬事不都合絶倒すること多し。

〔廿三〕 五綵の山水

三州新堀をかさきより深見莊兵衛木綿問屋といふ人あり子息は左太
郎といふ。狂名を朝倉笑といへり。この家の納戸の椽頰戸のふし穴に。
紙を一尺ばかり手前よおしあてれば十間ばかり先の泉水草木悉く紙
中にうつる。その鮮明畫るが如し。五色は五色にうつり天色は天色にう
つる。尤いづれもさかさまにうつるあり。予が見しときは。池よ杜若あり。
竹あり柳あり。庭よ小兒の手習草紙ほしてありしが。表紙のもん字年月
まであざやかよよめたり。雲の追〳〵にあつまり。又ちりゆき。竹やなぎ
の風よ戰ぎ池よ漣のたつなど。言語同斷の景色。理外の機關なり。主人こ

南村輟耕録 巻ノ十五

平江虎丘閣版上有一窾當日色清朗時以掌大白紙承其影則一寺之形勝悉於此見之但頂反居下耳此固有象可寓非幻出者松

いろみは庭に小兒を出して見せしむるに眼鼻衣服の模樣までよくうつれり。わづかは是ばかりの戸のふし穴より。みの紙一枚の内へ。方十八間の山水明細はうつること。蘭畫びいどろかゞみといふものは似たり。戸をたてこめて内いうすくらまた京大宮どほり百姓丹羽又左衛門が一窾當日納戸のふし穴は紙をさしかざせば。東寺の塔あざやかにうつる。これも色清朗時まはうつさかさまはうつるあり。また信州上の諏訪藥師堂のうらの羽目のふし穴よりも。塔影のうつるといふことはかねて聞しが。いまだ目前は見ず。京と三河の事と予遊歷の序まのあたりは見たり。おもふは日さゝの自然とは。からしむるものなるべし。日中はうつること尤もあざやかなり。世間にかゝることまゝあるべけれども。幸はその方はふし穴あく。また人のつねにいたらぬところなどまて。氣のつかぬあるべし。今按ずるは輟耕録に塔影のことあり又酉陽雜俎はもこれに似たることあり。かゝれば異國に

江城中有四塔夏監運家乃在四塔之東而小室内却有一塔影長五寸許倒懸于西壁之上不知從何來然不常有或時見之焉是又不可曉也

もむかしよりありしことゝ見えたり。

〔廿四〕名古屋訛

名古屋人いするといふをせるといふ「コウれつせる」「どうせる」「何いはつせるろたぐひなり。また人とゝいはず。仁といふ。かの仁がきさつせる「よい仁でやゝどなり。よい人とゝいたゝていはぬなり。又きんとしたゝいふ。りつぱのゝたち。又きつとしたといふことゝよもゝよふなり。

なごやなまり

昨日きんよふのばんね。「いかずと。文「いふ」も。「おれを」たち「かし」ちやう云ら汝ナリソナタノ訛かー。「ひなたゝ。どこの」ごつさまと。人の家婦ニ間姪スルヲ他邦ニモアリトイヘドモコノ地最甚シコレ娼家ヲ禁スル故どこの「どゝ」やばで「ねつ」ふかれ。よんべついご。敢テ意ナルベシずね。不來ようまちぼけにあゝさーた。いまゝ〳〵しいが。「ひよいとまた。「よみぞこなひも。「あらアずと。「ヒやうねさ。よつぴてくりかへし。やけを「おこして。

ねたはひなんし。腹立ノ貌又○又どうでどやけしやなどいい放逸ノ貌ふもはらだちのかたちなり

〔廿五〕名古屋の風俗

名古屋ハ男女の風俗。もつぱら大坂をまなぶあり。えびしりわげ男子の髪の風ねぼこづと。女子のなどあり圖ハ末人氣の活達なるは江戸ヨ倣ふなり。客嗇は京をまなべり。故ヨ江戸の戯作狂文も名古屋までハよく通ずるなり。大坂ハ通ぜずといへどもこれを名古屋の女子顔色の美なるも。腰ハ大ヨ太し一人として細腰なるハなし。これ風土ヨよるにや。男子夏ハよろこぶ京の人ヨハ一向通ぜず編笠を蒙りて歩行す。日傘をさしたるもあり。但藩中の女子のミ。萬事江戸の風俗ヨ異なることなし

〔廿六〕名古屋の評判

名古屋ハ魚肉ヨ富たる所なり。魚町七ツ寺などよき酒樓あり。蒲燒屋と稱するもの一種ヨあらず。種々の料理をもするなり。蒲燒の風味。京江戸

にハれとれり。硯蓋ヨも蒲燒をつむなり。凡劇場の外。三絃停止なり。見世物おども。太皷のみなり。凡酒樓中客二階にあれバ。男子出て酌をとる女子ハ二階へ上らず。國禁の甚しきことこれヨてしるべし。名古屋にて針妙と稱するもの。三州あたりの街妻に同じ。これも今ハ稀なり。呉服屋ハ水口屋繁昌なり。煎餅ハ岡山姿見などいふ家ヨ。狂言踊衣裳ハまく屋。皷太皷ハ春田屋。浮世繪ハ駒新。唐繪ハ月岌。紅白粉ハ鏡屋。造り花ハ吹田屋。書肆ハ風月堂。永樂屋。貸本ハ湖月堂。菓子ハ寶屋。鮎ハ岐阜ヨ來るをヨしとす。狂歌ハ田鶴丸。誹諧ハ士朗。この外いくらもあるべし。春日遊山の地ハ門跡のかけ所。若宮八幡。七ツ寺熱田櫻の天神等なり。天神の別當を岳靈院といふ禪宗數品の古瓦をあつめて瓦礫舍又夏日納涼の地ハ廣小路藥師といふ風流ノ莚會ハこれヨて興行す瓦礫舍の實弟あり奇石を敷十前なり。柳の藥師の別當を正傳寺といふ。この兄弟風流の人なり。柳下亭と号すあつめて多くもてり柳下亭ヨ軒の出茶屋見世物芝居等ありてはなはだヨぎハへり。柳の藥師ヨり廣

追書

福富のさ京ーは
ら橋本にて
經亮の所藏
りそを見たう
つさせー
が京傳子

小路の景色(けいしき)江戸兩國藥研堀に髣髴(ほうふつ)たり(さもにたり)納涼の地い琵琶島よしといへども道遠し故に水邊にあらすといへども廣小路最繁昌せり

〔廿七〕甚目寺の鐘　此條も雨談よ載たれば省く

〔廿八〕繪卷物　附水滸後傳目錄

名古屋よて見たりし繪卷物　名古屋　山崎良民所藏

一すゝめ松はら　繪卷物一卷

勾當の內侍の作といふ雀の死したるを諸鳥のとむらふなりいま

しへの戲作なるべしいづれの時の內侍にや詳ならず

一福有のさうー　繪卷物寫一卷　鈴木甚五左工門所藏

京よありし日おなじ雙紙のうつしを見たり橋本氏の所藏なり今

兒童の夜語よ花咲ぢゝといふものよくこの福有長者のことに似た

り是より出たる話よや

懇望によりおくりありたへたり雀松原作者勾當內侍事後よ伊勢一小友人津桂窓云この勾當內侍はおそらく後土御門院の時四辻季春卿よて新撰筑波集の作者の內才女なりしが筆なるべし。後この前後勾當內侍ある才女

一花鳥風月　繪卷物一卷　名古や柳下亭所藏

一天狗の內裏　繪卷物

これは先年名古屋の道具屋にありけるよしいづれの旅人かもと

め行けん次の日問ふにられたりといひしとぞ名古屋人もをしみ

あへり

一國姓爺後日　義太夫本近松作大字繪入　柳下亭所藏

一美本繪入三國志演義

これらはいづれもとかしきものあり予も逗留中珍書といふほど

よはあらねど古本をすこし購得たり

又名古屋廣小路枡座守隨の藏書に水滸後傳十卷あり主人をしみて人

に見せず予柳下亭よ就てその目錄をうつしたり

○水滸後傳　古宋遺民雁宕山樵編輯　金陵懸客對雲主人評定

りしを聞かずと云り。

第一回　阮統制梁山に咸一舊す　張幹辨湖泊に尊す災ず
第二回　毛孔目横に呑む海貨を　顧大嫂直に斬る豪家を
第三回　病尉遲間住遭て殃に　欒廷玉失レ機を入レ夥に
第四回　鬼臉兒寄レ書を罷レ納に　趙玉娥街色に招レ奸を
第五回　老管營蹇遭て横死に　撲天鵰寃被て拘囚セに
第六回　飲馬川に李應重て與す　虎峪寨に魔王鬪レ法を
第七回　李艮嗣條陳て賜レ姓を　鐵叫子避レ難を更レ名を
第八回　萬柳庄に玉貌招レ殃を　寶帶橋に節婦遇レ故に
第九回　混江龍賞レ雪を受レ祥符を　巴山蛇截レ湖を徵す重稅を
第十回　墨吏賠錢を受レ辱を　豪紳飲賄に傾レ家を
第十一回　駕に長風に樣雄圖に遠略を　射に鯨魚に一箭顯す家傳を
第十二回　金鼇島に開レ基を殄暴す　遐羅國に被て囚レ和親す

第十三回　救に水厄を天涯逢に故友に　換て眞方を相府藥に佳人を
第十四回　安大醫遭レ讒に避レ砭を　聞參謀高星に留客を
第十五回　大征戰耶律奔潰す　小割裂企弓獻レ詩を
第十六回　潯陽樓に感レ舊を題す詩を　柳塘灣に除レ兇を報レ怨を
第十七回　穆春喋に血を雙峯廟に　扈成計敗て三路の兵を
第十八回　黃統制遭て枉陽山に　焦面鬼謀レ妻を落レ井に
第十九回　納て平州に王輔招レ兵を　逐て强徒に徐晏奪レ甲を
第二十回　賣に揚劉村に狂豹累す呼延を　失て保定に朱仝投レ飲馬に
第廿一回　李應火燒に万慶寺を　柴進仇陷て滄洲牢に
第廿二回　破て滄州に義友重を逢ふ　困て汴京に奸臣遠竄す
第廿三回　喪て三軍に將材離て火宅に　演て六甲に兒戲陷て神京に
第廿四回　獻に青子に草野全く忠を　贖て雛人に石交仗レ義を

コノ回王進ハジメテ出ル
第廿五回　折王進小乙逞雄談　救關勝大名施巧計
第廿六回　逢天巧荒殿延英　發地雷寺基殲賊
コノ回柴京薊貢コロサル
第廿七回　渡黄河叛臣顯戮　贈鴆酒奸黨凶終
第廿八回　横衝營瞞馬歸故主　鄆城店小盜識新營
第廿九回　還道村兵擒郭道士　柴髯伯義護美髯公
第三十回　聚堂雲兩寨朝宋　同泛群雄碎地　コノ回義友日本サツマヘイタル
第卅一回　國主遊春逢羽客　共謀叛遇番僧
第卅二回　慶生辰龍舟見競渡　基寶位綺席進霞丹
第卅三回　頭陀役鬼燒海泊　李俊誓志守孤城
第卅四回　大復仇二兇授首　議嗣統衆傑歸心
コノ回日本ヨリ共濟カ殘黨ヲスクフナリ
第卅五回　日本國興兵擒賊　青覓島煽亂殲師
第卅六回　振國位勝算平三島　建奇功異物貢退方

コノ回公孫勝辭シテ山ヘカヘル
第卅七回　金鑾閣仙客留詩　牡蠣灘忠臣救駕
第卅八回　武行者僧房叙舊　宿大尉海國封王　宋ヨリ李俊ヲシヤムロ國ニ封スルナリ
第卅九回　丹霞宮三眞修靜業　金鑾殿四美結良緣
第四十回　荐レ故ヲ歡レ燈ヲ同宴樂　賦レ詩演レ戲ヲ大團圓

以上四十回目錄畢

卷中ノ人物○印ハ星外ノ英雄△ハ星中英士ノ子孫口印ハ李俊ト同盟ノ人前傳ニ小集義ト云ニアル人ナリ◎印ハ暹羅國ニ止ラヌ人ナリ無印ハ星中ノ豪傑ナリ

李俊シヤムロノ王トナル柴進シヤムロノ丞相トナル◎公孫勝辭シテ山ヘカヘル李應　蕭讓　燕青　樂和　蔣敬○王進　欒廷玉扈家庄軍法ノ師　朱武　樊瑞　關勝　孫立　呼延灼　朱仝　黄信○扈成一丈青ノ兄ナリ　阮文七　婁宜　戴宗　鄒潤　穆春　杜興　楊林

聞煥章　コノ女ヲ立テ俊ノ后トス　花逢春花榮ノ子ナリ。シヤムロ國王ノ女ニ戀シテ附馬トナル。初メ逢春シヤムロヲ伐シトキ。公主檐ヨリ逢春ガ美少年ナルヲ見テ密ニコレヲ戀フ。李俊シヤムロ王ノ爲ニ。共濤等ヲ亡シテ後。國ヲ逢春ニユヅラント云。逢春シタガハズ。衆オシテ俊ヲ王トシ。逢春ヲ附馬トス。コレ俊シヤムロ王ノ爲ニ。逆賊ヲ亡シタル功アルヲ以ナリ。○ハシメ共濤企叛シテシヤムロ王ヲコロシ。位ヲ簒フ。李俊一人シヤムロニアリ。依之俊兒兵トタバカフ。共濤日本國ヘ救ヲ乞フ。日本關白三万ノ兵ヲ發シテ來リ救フ。コノ回ノ評ニ云。關白ハ官爵ナリ。關氏ノ人ニアラズ云々。關白ノ兵來ラザル以前。共濤等首ヲ授ク。コヽヲ以テ李俊勢サカンニシテ。日本ノ兵ヲ敗ル。關白ノ兵船。大風ニアフテ。ソノ終ヲシラズ。文中關白トノミシルシテ。ソノ姓氏ナシルサズ。コノ作者明末ノ人ナルベシ。故ニ關白ノ名ヲ聞ヿ久

シ。依テ大將ヲ關白トス。胡蘆スルニ堪タリ。○柴進ヲ丞相トスル條下ノ評ニ云。進ハ宰相ノオニアラズ。然レドモコノ人名家ノ子孫ニシテ。又德行アリ。故ニ衆人ヲシテ相トス云々、

△宋安平宋清ノ子　△呼延銑灼カ子　△徐晟金鎗子徐寧ノ子　宋清　凌振　安道全　金大堅　□童威　□童猛　□費保　□高青　□狄雲　□狄成　孫新　顧大嫂　皇甫端　蔡慶　◎武松　武行者ハ。シヤムロニ至ラズ。最期ニ群雄ノ忠義ヲ論シ。宿大尉ニ請フテ。李俊ヲシヤムロ國王ニ封ズ

以上四十七人

追書　伊勢桜坂の友人殿村佐五平近ころ京師よりて水滸後傳を

この書倉卒にしてこれをよめり。故にその目錄を抄出して後勘に備ふ。

水滸後傳もと二本あり。共に今世にまれなり

大坂の國瑞の話に。予崎陽にありし日。水滸後傳を得たり。そのころハ小

購得たりといふ享和中予尾張名古屋の客舎に一閲せしかゝ倉卒の際多くは忘れたり、借りて覧せまほしきよ！をいひつけかわうしひて郵附して三日庚寅一日廿日月右の書全十回十四冊島屋より来る、佐

説にこゝろなりければ、價廿目ばかりよかへて人にやりぬ。今おもへばをしむよ堪たりといへり。大坂逗留中、書肆より水滸後傳のことをきくよ。その名をたよりらぬ書肆多し。江戸にてもたへてこの書をみることなし

水滸後傳二本あり。一本は四才子傳の評をせし天花翁の作なりといふ。予いまだこれを見ず

馬琴按するよ。寛永年間、山田仁左衛門といふもの、暹羅國に渡りて登用せられ、大國あまた領せしことあり。その事、智原五郎八が暹羅記事にくわし。されば水滸後傳の作者、粗山田仁左衛門が事を傳へ聞て、李俊がことに撮合せしよや

仁左衛門が暹羅國より奉納の繪馬駿府の淺間の社よありしが、近属本社回祿の時、かの繪馬も燒たり。其寫し神職の家にありといふ。

五平も篠齋と號す松坂の豪富よて、本居宣長の門人、和歌を嗜み又和漢の稗史を好む百十里外に在て書を貸すに友は多く得がた

再按するに、山田仁左衛門が事も、唐山よて水滸後傳の作ありしより少し後なり。かの書よ撮合せしよはあらざるあり。余が考別記よあり。今亦贅せず

〔廿九〕名古屋の芝居

名古屋の芝居は、橘町と大洲よあり。しばらく中絶して又近年免さる。竹田からくり名代なり。俳優の九人の外を免されず。予が見たりし時の藤川八蔵、中山一德、松本よね三、中山文五郎、市川甚之助、國藏弟子中芝等よたてもの て釜か淵の狂言なりき。切狂言よ、米三が無間の鐘、評判尤よし。米三の始終評判よし。八月に至りて兵太郎、歌右衛門、叶眠獅、雛介弟女などくだれり。もじめ橘町にて興行八月は大洲の芝居なり　二階棧敷なし。又辻富は椀膳にて運ぶことを禁て。故に食物を七寸位の重箱に入れて運ぶかり家家見物の前にハ重箱とつみあげて見るにわつらはし。又茶菓子などうるものは悉く十四

五歳の童なり。茶いらんか。菓子いらんかといふ。すべて名古屋在津島邊言語甚だ野鄙あり

木戸に給看板なし。板よ俳優の名を書つけたると。幟のみなり。名古屋の町人ひいきの俳優へ。あらそうて水引をやる也桃色の木綿よ墨よて進上某丈の文字をぶつ付書になしたる出來合の水引もあり

〔三十〕名古屋の天王祭

名古屋天王祭の車樂は。一輛ゝ組。はやく上よ山と飾。鉾なし。車は大なる地車あり。大八よはあらず。牛をつけず。大なる綱一筋つけて。數十人これをひく。車樂の欄干はろぬりよりて。かな物又立派なり。四方よ猩々緋。或く天鵞絨よ金絲のぬひものしたるきれをさげて甚だ奇麗なり。上よはいろ〳〵の人形をおく。その人形拍子よあはせてさま〳〵の機關あり。笛。太鼓。つゞみ。ゆんぎりよて拍す。祇園はやしなり。警固は上下を着す。袴羽織あり。船鉾は涼のうつしなりといふ。伯樂天全陵王布袋から

子人形のお壽老人。同上布袋の車樂は。から子の人形前に立。筆をとりて文字をかくからくりよて。甚だ手際なるものなり。凡車樂七ツばかりもあるべし。十五日の夜試樂。十六日未明より城中へ引こみ。日暮てかへる。車樂に挑灯數十張をつけていとはなやかなり。四月十七日東照宮の御祭禮ありりの禮嚴重なりと云

名古屋堀川の向ひは蔦のもの多く居る所あり。此所にてわかきものども。六月天王祭のまへ十一二日頃よりまい夜いろ〳〵の俄をする。或は大なるはんぎりの桶をおき。そら豆壹升廿八文と書たる札を出し。その側よ莚を敷。數十人丸裸になり。尻の方を上よむけ。うつぶけにあり居て。そら豆のかたちに似せて。人をわらはせるあり。宵より五ツ過まで。ゥやうにかゞまりゐる。又は人家數十軒をうちぬき。門毎よ大なる桶を横よふせ。底をぬきて目がねの如くし。庇には山川草木をあやしく造りなしてその上に七八人さま〳〵ゥゥでたちて。あやつり看板の人形の如

く見せる。これも五ッ過までハ身うごかしもせず。さて桶の穴より内を見れバ向ひハ隣堺の垣など引ハらひ。厠物置も脇へ引て野原の如くし。曠々たる所に。數十人忠臣藏夜討の体にいでたちてならび居る。のぞきからくりの俄あり。警固のものハ上下を着てのこらず庇にならべり。この外毎夜さま〳〵の俳優をなす。畫ハ崩したる所をつくろひ。夜ハくれよりしくみよかゝる。その体甚だいそがし。又七月盆中。名古屋の市中。小兒ちひさなる万度を作り。太鼓よてハやしあり。これを梵天と名づく。大人もうちまじりて種々の俳優をなすといふ。名古屋の天王祭宵宮ハ家々餡餅を製すると恒例なり此地うどんはなはだよし

〔卅一〕津島の挑灯船　此條雨談よくハしけれハ省く

〔卅二〕藝ハ香の物　右ハ同し

〔卅三〕江州の大水附攝河大水の噂

六月三日より雨ふらずして暑氣甚し。廿五日にいたりて雨少しくふれり。近在みな芋ず予ハこの時名古屋にありき。廿七日の朝桑名四日市邊。朝四ッ時頃まで雨ふりけるはしなれど。宮ハすこしふりぬ。宮と島見ハりめしもりをおくとをゆるさる。吉田おか崎にハ似ずいづれも醜婦なり名古屋人これをにくかめと渾名せり。妓樓もあれど。旅人ハその旅店へもよぶ　廿七日に宮より乗船この夕石藥師泊り。明朝より大雨廿八日水口に泊る。この夜ます〳〵大風雨。廿九日の朝横田川水口よりまでいたりしゝど。水まして渡しなけれバ。せひなく晝頃又水口へ引かへせり。餘の旅人ハ横田川の川端いつみといふ所の建場茶屋へ泊るやうすなれど。予ハ人足の都合なしけれバ泊らず。その夜大水。水口田町へハ床上四五尺水つく。驛のうら手の田畑一面に水れし來り。見るうち五六人溺死す。予ハ驛の中程鈴鹿屋とゆふ旅店にあり。この所ハ高みにて水難なし。いつミハ十二軒ながれたり。もし今日いつみの建場茶屋へ泊りなば。む

なーく水中の鬼とあるべきを運つよくして一命をひろひぬ。いつゝよ泊りし旅人七八人みへざるよー土地の人いうらよ大竹藪ありこの竹にとりつきてたすかりしといふこれによりて一両日水口よ逗留す七月三日の晝頃水口をたちて石部に至る。此間所々の堤崩れて田畑をおし崩し街道ハ古松倒れ。碌々として足を入るゝの地なし。

横田川よ

ところんでもたゞハおきじとれもふなり大事の命まつ飛ろひつゝ

澤蟹のあゆみて渡る横田川あゝ遠く來ぬふるさとのそら

洪水よ家を流されたるもの道路よ號哭し。或ハ太鼓をならーて人足をかりあつめ。堤を修覆し。水死の骸をたつぬ。みるもの感哀ーで魂をいためーめずといふをあし。横田川をわたりて二十町ばかりゆくよ。牛を牽て田畔より來るものありこの牛脊の上よ泥つきて。腹ハ細くその聲悲し。その人の云。是ハてばといふ所のものあるが。洪水いまだひかそして。

牛に飼ふべきものなし。故よ石部の在よ去る人あれば牛をおばらく預ん爲よ來りしといふ。予この牛を見て。梁の惠王の仁をれもふのみ。程なく石部にゆきてきくよ。草津驛洪水にて家流れ人死す。故に昨今往來なしといふ。よりて今日石部よ泊る明日徑(コミチ)あることを聞出し。案内をやとふて石部をたつ。艸津までの間。堤崩れ家流れてきすく駭然たり。草津の驛の入口よハ。膳所より役人詰居て。人を通さず。よりて近在へ水見廻にもく體にもてなし。驛の入口より左りへきれて。田の中を行くこと十五町ばかり。水高もゝをひたし。長き竿を杖とし。一歩ハたかく一歩ハひきく。互よ聲をかけ。からふじてうばが餅の前へ出たり。是よりハ陸地なり。問屋より表通りの家八九軒れし流しうら通りハ人家多くながれ。四五十人も溺死す。死骸ハ積て累々たり。これのみならず。森山。彦根。又大水。家流れ人死ーたりといふ。予か荷を持たる人足も庇(ひさし)よとりつきて。十町

ばかり流れたりしが。去れる人の家の二階へ流れつき。すぐに二階より這ひあがりて。一命をたすかりしといふ。阿波矢この時ゐち川より居たまひしが。守山の洪水よりて。胴勢食物乏しく難義したまひぬとぞ。只嚴々として東西この話のみなり。大津も驛の入口はすこし水つきたりと見え。石橋など少〻く損してあり。逢坂山は山中大よ崩へたるよしあれど。街道へ山少〻崩て一兩日馬を通さず

あふさかのせきとめかねつ秋の水

三日の夜。京都木屋町の旅宿へたどりつきてみるよ京へ水難なしといへども三條五條の橋の外。かり橋へみな。なおー流し。河原茶店の腰ゐけ等みな流したれば。涼しもなく寂寥たり。さて五七日へ大坂への通路もなく。只攝州河州洪水の風聞まち〳〵なり。四日の朝角倉家中森氏の話に云。余きのふ伏見へ水見聞よまかりしーよ。伏見豊後橋中書島等へみあ二

階より船よのりて逃しとぞ。淀の城へ塀の屋根少〻見ゆ。大坂天滿橋天神橋その外橋五ヶ所落たりといへど。いまだ通路なければ治定ゐがたしといへり。今日清水よのぼりて。伏見のかたを眺望するよ八わた山崎邊水一面にーて只眞白よ見ゆ。四五日經てよう〳〵大坂の通路あり。ゑめ野堤きれて河内へ水れー入。水損の農民へ道頓堀の芝居へいれおかれ。大坂中の豪家或へ一町〳〵よ組合て施行を出す。或へ米五十俵錢百貫文。或へ單物五百。繻絆千枚身上の分限よりて差あり。凡攝河の水損百二十餘ヶ村なりといふ。十人これを語れば十人大同小異なり。只聞しよりまされるものへ大坂の施行のみ。宇治邊大洪水宇治はーへ落て橋姫の社流れ。興聖寺平等院邊よ荒れたり。八わた山崎邊へ水十八九日ひかず

七月十日頃大阪より京へ東の洪水を告來るうの文よ云

六月廿七日八日大風雨忍領熊谷土手二百間許一ヶ所切込又一ヶ所

八十間餘切込夫より東の方幸手栗橋近在方關宿權現堂切込奥州海道中山道今五日迄往來留所々家流れ水死人あり江戸本所北川筋三圍秋葉邊出水往來凡五尺程相州戸塚邊近在方大水六郷川廿八日より二日朝まで留る馬入川廿八日より四日まで箱根三枚橋落大井川廿八日より八日已之刻まで留り鈴鹿山崩れて馬荷通らず廿八日大雨廿九日大風雨辰巳の風つよく八王寺青梅邊甲州海道往來留所々洪水のよし申來候

又同狀より六月廿五日大雷にて大風雨ふり出し廿八日大風雨大水雨國橋殘り永代橋大橋新大はし落る朔日天氣より候得共上州下總常陸相摸邊通路一向無御座江戸本所邊昨日の内段々水まし床上三四尺も附申候葛西領二郷半領上州桐生邊家流れ千住通奥州海道いまだ通路無之相知不申候

七月五日の註進狀

又近在水損の農民は馬喰町の明地へ小屋かけしてこれへ入おかれ上より施行ありしより是ハ程へて申し來る

予ハ古郷の事覺束なく又江戸よりても道中出水の事を聞及びなべさぞ案じ惱るならめと京へ着とそのまゝ狀をたゝめ引つゞけて三度出しけるが川留よりて速よハとゞかず。ようく七月十五日より四日出の狀をゞきしより。又江戸より出したる狀ハ八月三日の朝大坂へとゞきぬ。この間の心痛なかく筆よつくしがたし。さらぬだに旅ハものうきものなるに。獨行と云ひかゝる天變にあひぬれば。只日夜腸を斷のみ行んとするよ道なくかへらんとするにちまたなし。家におさあきものを殘して。長く旅中よあれば。一日も猶三秋のごとし。晨より夜より忘るゝひまなく。こゝろよかゝらざる時もなし。行脚頭陀は一身のうへの風流なり。それも君につゐのへて遠行し。或は軍旅よりしたがふて遠征する身よりあらば。思

翁の伯兄名は興言臺右衛門と稱し東

ひかもべき事もあらん。我只風流の爲に長旅を歴んとそも誰が爲ぞや。世よ子と云ものもたざる人は。この情をしりがたし。古人世を金馬門に遊て。風流は俗塵中よもあるべし。老たる親いときなき兒のあらん人あへて山川の遊歴をねがふべからず。すべて遊といふをば。こゝろよかゝる隈もなきを第一の奥とす。つねよものおもへば何のたのしみかあらん。子なき人のいふをきけば。遊興歡樂よあるの日も。妻子のとも忘るゝといふ。妻の事は忘れても忘れあん。忘れがたきは子の事なり。美味をくらへば子をおもひ美服をみれば子をおもふ。我人愛情のつねなるべし

つまや子は衣服といへと旅ころも遠くきて猶おもふ古さと

旅ころもはころひにけり古郷のいと戀しさよつまもかさねす

家兄世よいまそかりし日は。常に往來して風流の夜話よふけりしも。今はみるもの聞もの。かへり來てたれにか語らん。これも旅中袖をうるほ

岡舍羅文と号す仲兄名は興春初右衛門と稱し克巳亭雞忠と号す

すの一つなり。おのれ九歳の春父よおくれ。十八歳の夏母なくなりたまひ。十九の秋兄をうしなひ。只家伯ありける人。近きわたりの藩中よおはしければ。これを父とも兄ともかしづきて。兄弟そのこの心所もたがはず。兄は詩譜をこのみて。才器ははるかれのれにまされり。これさへ寛政十年の八月。四十の秋の月を見殘し。黄泉の客とありたまひぬ。殘れるものは妹ふたりのみ。これらは詞かたきとなるべきものにあらず。おのれ元より佛の道ようとしといへども。紀の國高野山にまうづべき志かねてありぬるを。この洪水にへだてられて。つひにゆかずなりぬ。萬事の殺風景これのみよあらず

〔卅四〕 粟津の義仲寺

江州粟津義仲寺のはせを塚へ。碑の銘なし。義仲の墓ればるか後に建たるものと見ゆ。

世の秋のさいハひハこの翁かあ

〔卅五〕 瀬田蜆

瀬田の蜆汁ハ。醬油のすまし吸物なり。鹽梅またくらふべからず。

〔卅六〕 鏡山 附源五郎鮒

近江の鏡山ハ。石部のこなた。平松川邊より右に高く見ゆ。山色斑々として白銀に如きものあり。雪の消殘りたるがごとし

鏡山うつる日數も旅くしげぶた月へたつ東路の家

近江の源五郎鮒ハ。一説ニ佐木家一國の主たりし時錦織源五郎といふ人。漁獵のことを司る。湖水ニ漁りたる大鮒を。年々京都將軍に獻ず。その漁獵の頭人たるによりて魚の名ニよび來たれり。

〔卅七〕 三上山 附百足山 雨談ニくわしければ省く

〔卅八〕 三井の古鐘

直輔親王ハ後陽成帝第八皇子幼くして智恩院ニ入せたまひ元和元年徳川家康の猶子となり五年同年剃髪名

三井寺の鐘ハ古くより。浮屠の説ハ信ずるに足らず。辨慶が叡山ニ引あげたりし時。すれて鐘のいばとれたりしといふ跡あり。おもふニこの鐘久しく水中に埋れありしものニて自然とすれ損じたるニやあらむ。又大門のうちに辨慶が陣錡といふものあり。凡湖水の眺望三井の山上ニし。ニかれども志賀越の眼下ニ見おろすニおよばず。

〔卅九〕 奴茶屋 雨談ニのせたれば省く

〔四十〕 遊女八千代が墓 ○是より京の話をゐるす

八の宮ハ。遊女八千代にふかく契りたまへり。日夜をかきらず放蕩その度に過たれば。その頃の所司代板倉侯。屢諫言ずといへども。もちひたまハず。板倉止ことを得ず。若干金を以て八千代を身うけし。これを八の宮に獻じ。ニかして後八の宮を配流せらる。則八千代もともニ配所ニ至らーむこゝをもて八千代が名。よし野より高し。橋本肥後守經亮話

追考。甲州一國ハ夏ほとゝぎす啼ず。かの國の人の說よ。八の宮甲州よまゝまし けるとき。なけべきくきけハ都のあつかしき此里すぎよ山ほとゝぎす　ゑれより杜鵑なかずといふ。家兄羅文の話程へて八の宮歸洛したまひぬ。

壬戌羇旅漫錄卷の上終

蓑笠漁隱遺稿　　坦庵居士正幹校

〔四十一〕　光廣卿の寛活

烏丸光廣卿の宅ハ烏丸中立賣よりうのころ牛飼ども。公卿の家よ牛を率ゆき。御用なきやと問ふ。用あれバとゞめ。用あければかへす。光廣卿ハ毎度この牛を雇ふて。花街にかよひたまひぬ。車の上よ戲を敷うの上よ酒肴を設け。自若としてかよひ給ひしとぞ。松波播磨守光興話江戸よてむかゝ馬をやとふて。よし原へかよひしことおもひ合されたり

〔四十二〕　板倉侯の大量

板倉侯所司代の時。すべて公家衆花街へゝよひ給ハんよハ夏ハ下よ白かたびら。冬ハ白無垢を着用あるべし。さからざれバ。制度の害よあるよし。かたくふれられたり。その頃までハ。政もゆるやかに侍り。同人話この二條橋本經

權大納言正二位光廣卿ハ准大臣光宣公の男也慶長四年藏人頭正四位ゝ叙す和歌を細川幽齋ゝ學んで出群の譽あり寛永十五年七月薨す年六十法雲院と号す

板倉周防守重宗ハ

勝重の男なり元和六年父がすゝめよつて京職に補せられ在職三十四年明暦二年十二月卒す年七十

亮來りてかたれり

〔四十三〕六條郭の全盛

板倉侯洛中通行の日。攝家の女中乘物にあふ時は。毎度酔酩せらる。或日また例の女中乘物に行あひぬ。侯馬をとゞめいづれの北の方よやと問しむ。從者おりれて。是は太夫よて侯と答ふ。侯大よ怒り。ずべて遊里を洛中の中央よおく故にかゝるとはあるぞとて。上に請ふて。郭を片隅へうつされたり六條のころ遊女の全盛。これよてゐるべし。橋本經亮話

〔四十四〕傾城局の券書　此條雨談に載たれば省く

〔四十五〕烟火城書書展覽目錄　上よ同し

〔四十六〕遊女よ一野が傳附蟹の盃

吉野沒年は寛永八年。六月廿二日なり。よし野は佐野紹益よ請出さる。紹益は灰屋と號す。豪富なり。吉野は紹益よ先だちて死す

よし野の傳は雨談に出たれども漏せし所もあれば錄し

蟹の盃圖說のとき雨談に悉しければ就て見るべし

都をは花なき里となしにけり吉野を死出の山ようつして　紹益

これその時述懷の題なり。或人云。吉野が屍は火葬して。紹益みづからこれを喰ひ盡しけり。紹益がよ一野に愛着せることかくの如し。是よりして灰屋の家れとろへたりといふ。經亮話

七月十七日橋本經亮とともよ。榮庵を訪ふて面會一。吉野が傳を問ふ。榮庵は佐野氏。京都兩替町二條下ル所よ住居し。醫を業とす。この榮庵よし野が夫紹益の孫あり。今おとろへて寒家となりぬ。榮庵云。祖父灰屋紹益が家は。智惠小路上立賣よありし紹益は和歌をたゝみ。蹴鞠茶の湯などせり。尾州紀州の兩公へ召れて度々出けるよ一承り傳ふ。吉野沒一てはるか後。浪華の小堀氏より妻を迎へたり。これよも子なく。七十三歳の時妾に男子出生す。今の榮庵の父紹圓是なり。紹圓五十餘歳の時榮庵出生す。榮庵も六十歳ばかりに見ゆ。紹圓も鞠をこのゝ一とぞ。この家よよしあるゝ諸侯なる

橋本肥後守經亮は京師の菓園と香號す京師の宮祠梅の官なり皇朝の典故にくわしく文化二乙丑六月五日十餘歳よて沒す著すところ梅窓筆記二卷世に刊布す畸人傳に

ついでよか、よしの野よりみえたまひて、いかよもこれがよろこぶへきものをあたへばやとまことに紫ひたまひて小倉色紙のうち俊成卿の歌世の中の道こそなけれとふ歌の四句の中の誤りとて山中の色紙傳へて名物となりたるを贈り給ふ、はたして是は二なくよろこびけるとぞ云ヶ

の川の裂。山中の色紙。蟹の盃あり。いづれも吉野より傳來の器物あり。桑庵にいたりてます〳〵窮するをもて。よしの截はよしの截よしの漢東これ也人にうりあたへぬ。山中の色紙ハ雲州侯へたてまつり。今家にあるもの蟹の盃のみ。又よし野紹益が書しものいろ〳〵ありしが。度々の類燒ようしなひ。又ハ人よのぞまれて今はなしといふ。二代目よし野が文ありしを見せたり。紋所の印ハ（巴）如此一ツ巴のうちよさくらの花なり。手跡も又見事なり。山中の色紙。廣東の襖。蟹の盃ハ。よし野花街あり〳〵日。薩州侯よりたまわりしものなりとぞ。

桑庵又云。紹益が菩提寺ハ。内野新地立本寺にあり。日蓮宗この寺そのころハ。今出川町よりしがそのゝち御用地とあり。今の地所よ引けたりし時墓も建かへしゝよや詳ならず。石面ハ紹益と吉野と戒名二行にほりつけてあり。紹益ハ八十一歳よて沒しぬ。

古繼院紹益　元祿四年十一月十二日

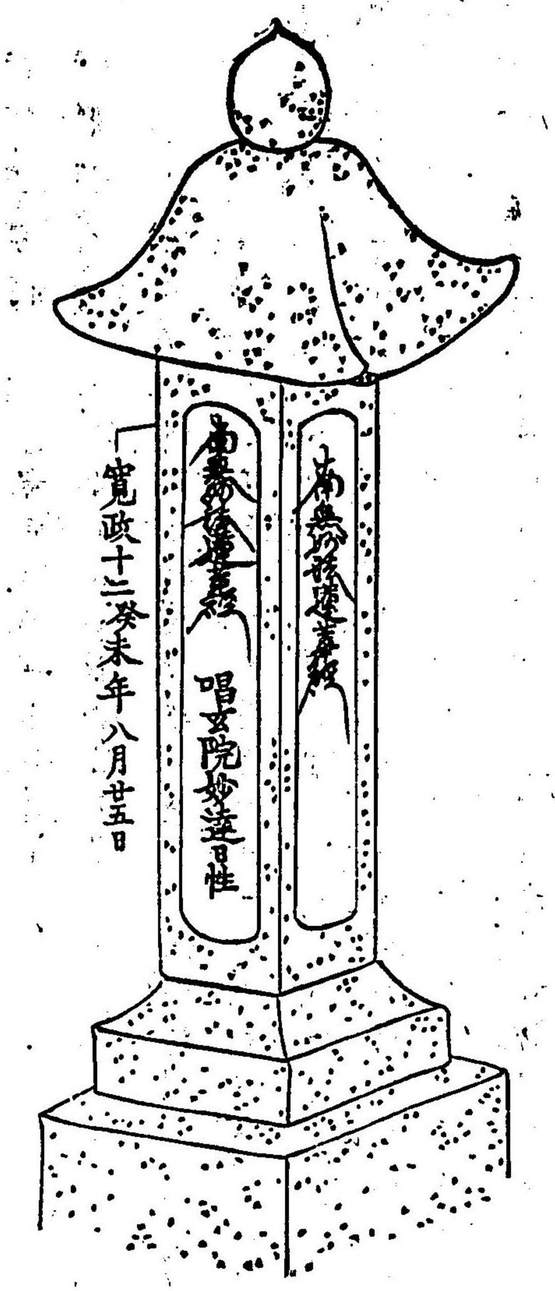
本融院妙供　寛永八年六月廿二日

これをもて考るに。吉野沒年ハ。紹益廿歳の夏なり。さかればよしの紹益が婦となりてほどなく。いとわかくて身まかりしものなるべし。うべなり紹益が玉をうしなへるの恨前の題を吟じてもしるべし。

桑庵よ紹益が歌のことを問しに相違なし。紹益ハ貞德と友としよかりしとぞ。

畜工成瀨正胤の話に。紹益よし野をうけ出せし時。父に勘當せられ。さへらく下京よすみ家もとめて夫婦住けり。父他へゆきしかへるさ。雨ふり出しけれバかたはらの家よ入りて雨舍りす。うちよハ爐よ釜をかけてあり。主人ハ留守と見へて女房のいとうるハしきが。こなたへと請じうす茶たてゝ出しぬ。その爪はづれ茶の手まへまで所よ見なれざるまゝ。

いとふしぎよ思ひながら立かへりて。次の日ゝかゝのよし人にかたるに。りれこう子息紹益が妾なれ。その家ゝ紹益のかくれ家なりと告ぐ。父もじめてさとり得て。りの奇遇を感悟し遂よ紹益が勘當をゆるゝよゝ野を引とりめあわせしとぞ。程遠からぬ下京に。りの子の忍び居るを



追書解按するに紹益かよきへ草よ載たる輟書記のあかゝに見ぬもろこしの鳥もこしなかゝになき魂なら

も去らざるゝ豪富なりしことゝ云るべしといへり。

友人虚橘ゝ京師の人なり。近曾よゝ野が墓を圖ゝてれくれり。

○吉野塚ゝ洛北鷹が峰。日蓮宗檀場學堂の後よあり

吉野ゝ京師大佛馬町桝田氏といふ浪士の女兒あり元和四戊午の年出生。行年三十六。畸人傳といふものに載たるもこれに同しいまだいづれが是あるをしらず。

又洛の立入氏賀樂老人より告來る。吉野沒する時紹益三十歳あり。八年ゝて二十歳なり。然れば十七八歳にてよし野を購たるか。法名前文のゝ通なり。壇上の三門ゝ吉野建たり。後よ火に燒て改め建たるよゝ寺僧語れり。紫庵が說ゝ心得ちがひなり云々

追考。島原の郭ゝ。寛永十八年六條柳の馬場より。今の三筋町え引けたりよし野ゝ寛永八年よ沒す。しかればそのころゝ猶六條のくるゝよ

は云々といふ二歌より異同あれとそをいふものあし考ふへし箕山は通稱を藤本了因と云貞徳門人よて兩巴危言好色大鑑あどあらはしたる人なり

て侍り箕山が色道大鏡よ。よー野が傳あるよし。大坂盧橘かたれり。予大坂逗留の日敵繼なるをもて寛文式二卷を閲ーたるのみ。もー序あらば併せ勘ふべし

〔四十七〕 島原の噂

島原の郭。今は大におとろへて曲輪の土屏なども壞れ倒れ。揚屋町の外は。家もちまたも甚だきたなー。太夫の顔色萬事祇園にはとれり。さかれども人氣の温和古雅なるところは。中〳〵祇園の及ぶところにあらず。京都の人は島原へゆかず道遠くして往來わづらはしきゆゑなり。ゆゑに多くは旅人をも祇園へ誘引す。角屋德右衛門が坐鋪庭等最よしとの庭の松甚よろし。松のかたちを紙にすり。求むる人あればあたへ侍る。その外露臺あどある揚屋もあり一眼千軒よくはしければ略す

一眼千軒は島原の細見記なり

島原よて。太夫をかりて見るといふ事あり。客ある妓も必ず來る。大かた大坂におなじ。くはしくは大坂の話にしるす

島原の燈籠七月よりあらず。八月初旬よりともすなり。予大坂より又京へ來りしは八月六日なり。昨日より島原よ燈籠ありといふ。一兩日大雨。終に一覽せずして京をたちぬ

島原に鹿子位といふ妓あり。これは江戸よし原のはし女郎よおなじ 半夜

五匁一夜十 一匁五分

〔四十八〕 京師の妓院

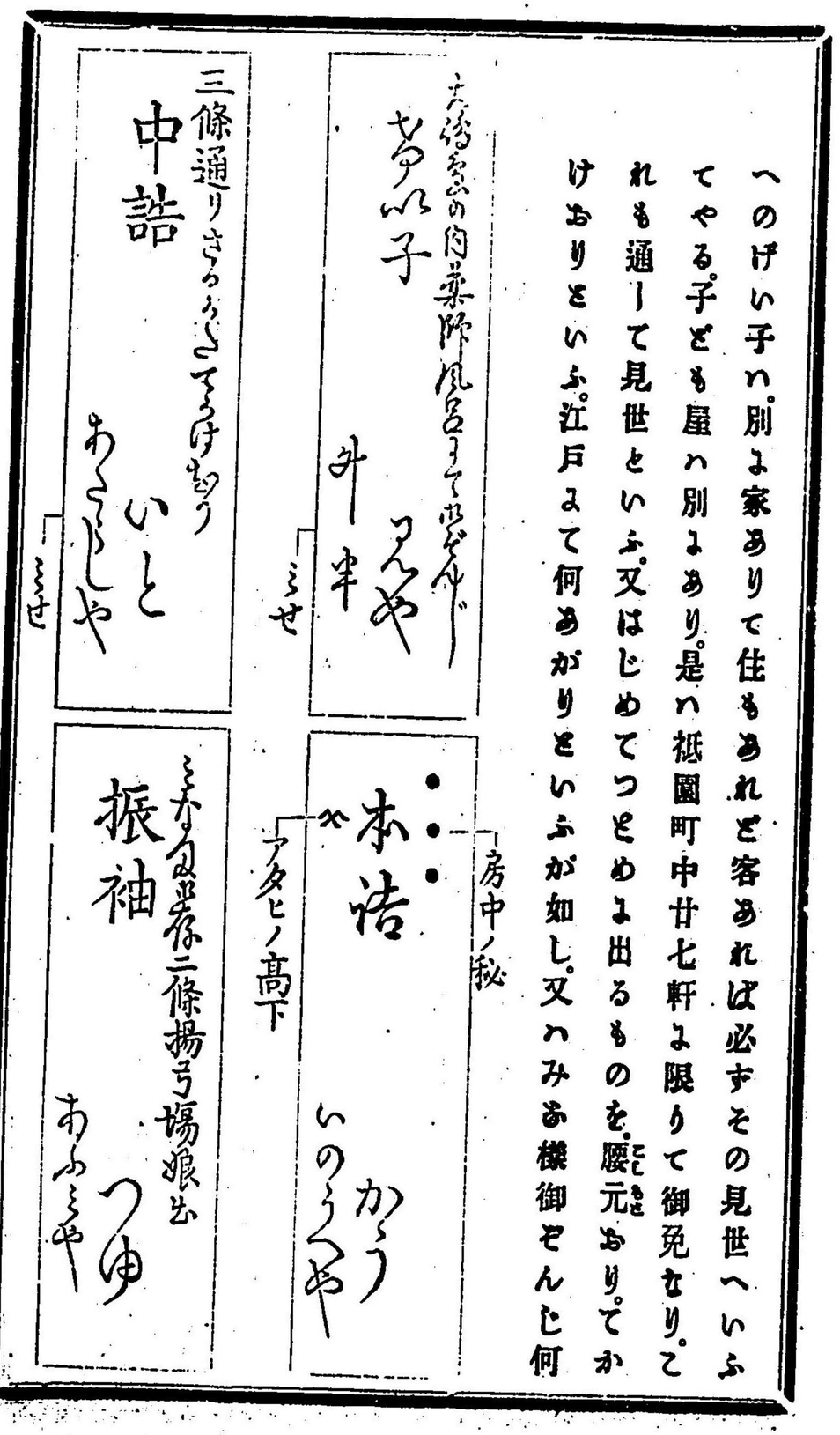
京よて島原の外御免の遊女町は。五條坂。北野。内野なり。五條坂はあこや株と稱す。又近年あらたよ免許あり。しかは祇園。同新地二條新地。七條河原等なり。其外西石垣。上宮川町。東石垣。下宮川町。古宮川町。六波羅野。御影堂うら。都市町。平居町。一ノ宮町。三ノ宮町。膳所うら。富永町。末よし町。新ばー。なべて。川ばた。先斗町。壬生。五ぺん町。七番町。三ッ石町。六間町。寺の前。ドノ

森上七軒。さら女の辻。御靈うら。杉本町。野川町。大文寺町。先斗町川ばた。難波町。若竹町。新車屋町。丸田町。檀王うら。等皆私窠也。凡洛中半ハ皆妓院なり。京の節儉ある人氣よて。かく多き遊のそれ〳〵ゟ世わたりすると。第一のふしぎ也。客ハ春他國の人三分二。地の人三分一也。秋より冬のうちハ。地の人三分二。旅人三分一おりと云。故ゟ秋冬ハさみ〳〵し

〔四十九〕祇園さし紙

祇園ゟ。祇園さし紙といふものあり。是ハ祇園町へはじめていづる。れやまげい子。ひろめと稱し。のり入のかみを。たてゟ四許に切り札とし。これへげい子雛。おやま雛。などくハ〳〵くしるして。茶やく〳〵へ配る也。茶やの勝手元。或ハはしごの上ゟ口ゟ。いくつともなく張つけてあり。おやまも藝子も。見世とうちとハ別なり。見世とハ。江戸ゟていふ見場也。扇九。一力。井筒など茶屋をたれハ何屋と定めれくなり。抱のげい子もあり。又じま

へのげい子ハ。別ゟ家ありて住もあれど客あれば必ずその見世へいふてやる。子ども屋ハ別ゟあり。是ハ祇園町中廿七軒ゟ限りて御免なり。てれも通ーて見世といふ。又はじめてつとめゟ出るものを。腰元おり。てかけおりといふ。江戸ゟて何あがりといふが如し。又ハみあ樣御ぞんじ何



屋の仲居おり。あど、もかくなり。げい子ハとしの長本詰とハ。本どしま眉毛なし。中詰とハ。中どしまなり。少ハ拘ハらずみなげい子と云祇園町のげい子ハうつくしく。れやまハおとれりけい子に勢ありて。おやまの上坐をする。初會の客ハ盃をあーすぐに客のかたハらへ來てすハる。いづれもかくの如し

〔五十〕 嫖客の噂

京ハ女郎とハいハず。女中といふおやまといふとハ。目下の人よりハいハず。げいしやといハずして。げいこといふ。夜ル五ツ時或ハ四ツ時ごろよりゆきて。花いくつと仕切を。相場をきくといふ。花入用とも二割引なり。宿屋より引つけたる旅人ハ。二わり半引せて。半ハ宿屋へとる。銀相場ハ六十三匁通用あれども。地の人ハ六十五六匁にて勘定する。京ハ現金の客をきらふとぞ。かけハ五節句拂なり。それも身分よろしき

方へハ。勘定もゆるやかなり。夫ゆへわれしらず遣ひ過るとありといふ。それよりも損をするとハ稀なるよー但勘定ハよくする所あり

〔五十一〕 きがへの譯

祇園の客。茶屋へゆきて酒をのまず。期よりおやまをよび直にぬるを。きがへにゆくといふ。期とハ夜九ツなり。期ならずとも。すぐよぬるを。きがへといふ。げい子おやまともよやくそくといふハ。晝ハ朝より暮まで。夜ハくれより夜明までかふてやるなり。もの日の仕舞といふをハなー。このやくそくをねだられるとあり。大坂も又おなじ。

〔五十二〕 藝子の枕金

げい子にまくら金といふとあり。是ハげい子の誰ゆ通ぜんとれもふ人。茶屋へゆきてそのををたのめば。茶屋その名を聞。あの子の相場ハ何程あらんといふ。相場とハたとへば顔色すぐれてうつくしく名ある歌妓

追書
掛窓云ふ
ろしきよ
あらず覆
よて二所
よちりめ

ん。まくら金二十兩。或ハ三十兩。うの次ハ十兩十五兩。いたつてあしきハ五兩三兩なり。三兩より下なるハなし。はじめよ件の金をやりてたとへバ二十兩のまくら金にハはじめ十兩やくそくし。ひそかよ茶屋へよびてあふわたし通じて後又十兩わたすなり。但あふたびよ花ハ別にはらふ。これを枕金の相場といふ。仲居或ハ茶やの娘。舞子も同樣なり。

〔五十三〕 舞子の評

舞子ハ十歳ばかりより十八九までなり。歌曲も雅にして。三絃は煩手ならず。ゑとやかよたち舞ふさまいとゑほらし。むかし白拍子が朗詠などにあハせて舞ふたりし遺風ありとぞおもハる。

〔五十四〕 三絃筥

げい子の三絃筥ハ。木地の桐の箱あり。風呂舗に包む。三絃ハいづれもつぎ棹あり。故よ箱ハ四角よて横少し長し。撥袋ハ撥のかたちよしたる盒

んの紐をつけたるものと聞にき

の黒ぬりを用ふ。琴ハふろしきよ包み。皷ハゑらべをかけて携へ出る。

〔五十五〕 妓の衣服

衣服ハ。妓ハ紫の絽の袷帷子。もゝ色の裾うらぶすそもやう。或ハ上布のかたびら。ゑゆばん縮ちりめん等なり。前へ引かへしておく帶ハ赤きが多し。ゆもじハ緋ちりめん。○げい子ハ上布。すきやちゞみ。紫の絽。すゝもうもあれども繻半を着ず。帶ハねづゝ縮子多し。ゆもじハいたじめのちりめん。いたしめのゆも緋ちりめんハ稀なり。京も大坂も。郭の外ハ。ミな左の手にてつまをとる。これを左りつまといふ。是おか場所のしるしあり。そのつまハ高くじねのあたりよてとる。其派手なり。ぎをん町五月晦日よりろひといふを着るこの時帶ハひちりめんよぬひなどしたるをしめるこれハ暑中汗よてよごるゝゆゑ妓も歌妓もみなひちりめんの帶を用もそろひのうちもひじゆすの帶などしたるもまれよあり

〔五十六〕 妓樓の夜具

客のゆかたハ茶屋よてかすあり。妓ハぶんこよ着がへをいれてもち來り。閨中ハ江戸染のゆかたなどを着る。扇ハぬりほねの銀扇。うちわハろぬりのふか草團扇をもつ。郭の揚屋祇園町も。夜具ハ。郡内縞のうすきふとん一つなり。大坂も又同し祇園新地ハふと織の蒲團。茶屋よりて木綿夜具をも用ゆ。太夫も伯人も夜具ハ皆かくのごとし。

〔五十七〕 京の女兒風俗

京の女の風俗。髪ハあぶらをすこしつけ。鬢を上へかつぎ上げ。髷を甚ながく出す。わげハひらたく。かつ山ハべったりと前へたふしかけ。島田ハしんを入れず。ばらりとして草たばねよす。髷いれハ太きはりが紙を紙よて巻きうるしよてぬりたるをもちゆ。すべて大阪名古屋伊勢いづれもこのたぐひよて。大同小異なり。大阪も水髪なれど。鬢へばらり多く油をつける。いせは丸く。名古屋は似て非あ

るもの多し。京都は地の女も髪の風妓とかはることなし。これは商人と妓とうち混じて居る故なり。化粧ハいづれもあつげせうなり。櫛は厚き高蒔繪のぬり櫛なり。大阪はべつぷう并ハ鬢中なり。敷本さーけるが。今年制

禁ありて。三本の外はさゝず。髷結のしぼりばなしのちりめんも今年禁制せらる。よりて紙をもつてちりめんのとく染たる髷結を用ゆ。以前は髪の上。數十金を費せしといふ。

妓は紙入ゑ紙いつぱいの鏡をつけ。白粉をちひさなるあさの袋ゑ入。席上ゑてたび〳〵けはいをするなり。げい子ハ巾着をつけこれを帶のうちへかくし入れおく。この袋の中ゑ化粧道具あり。これも席上にてたび〳〵臉を摸す鏡を懐中すること歌妓も又同じ。

〔五十八〕 祇園大樓の噂

井筒。扇九。一力おど。坐敷廣し。客あれば庭へ打水し。釣燈籠へ火を點す。忠臣藏七段目の道具建の如し。燭臺は木にてろぬりなり。大樓は燭臺四ッ五ッ。蠟燭ハ六寸ばかりあり。半分たゝざるうちとりかへる。うのたび〳〵ゑ必客の顔の色が變る。蠟燭一挺八分ッゝあれば。すべて茶屋ゑ刀

かけいくつもありて。脇差は枕上の床の間へかざりおく。大阪も又かくのごとし。大阪しん町あけやはろ是相對死などいふことたへてなき故なり。古市は近年油屋騒動ごのかた。客の脇差を内所へあづかるゑ江戸のごとし。

〔五十九〕 祇園の方言

祇園町の方言に。江戸ゑてつやをいふ。せじをいふをいふをあぶらをいふといふ。ぶだん來る。じやうぢう來る。などゝいふことを。いつしくゑおいでるといふ。まいるを參じる。よいをいゝ。ゑらい。又かいなをいふをあり。一人「これかこうこういふわけじや 答かいあァ。さやうかいなを略せり。これらいゝほらし。この外いくらもあるべしすべて女ゐなといふをそへていふ。

わしがけふあ。かみあらふてあ。とんとれちんさかい。いまく しう

てな。いろ〳〵したじやけれどあ。おちこぢれたさかい。見てれくれ。
かみもいつかうじやわいな。なんのいな。いつこうようでけたわい
あ。「ゑらふあぶらをいふてじやわいな。又めたかをうろといふこの
かくやのこうの物をせんたく香の物。」
ぎやきをなすびれでんがく。此類多し
大かたかくのごとし。江戸よてハいつこうといふをハ。わるきをよのみ
そへていへど。京よてハよきことよもいつこうよい。いつこうゑらいと
いふ。又茶屋の嚊をごつさんといふ。江戸吉原にてハ茶屋の亭主をごつ
さんといへハ。男女のたがひあり。「さかいといふ詞ハ。ゆゑにといふにお
なじ。江戸ハからといふ。歌にもふくからまをハよめど。ふくさかいまを
ハよまず。これらをや。京なまりとハいふべき。
文ハはじめてこすよも。旦那様と書く。いせハ御客様とかく書出しハいつでもお
〻それながら通り句也。げい子の禮文ハ。御ひいきねかひ上候。ばんほど

も御しらせなど〻書く。茶屋のか〻よりこすふみハ。御禮かた〳〵が通
り句なり

〔六十〕祇園の歌曲

今祇園にてもつぱらうたへる小唄を。八のうたひてきかせしま〻にし
るす。

扇手ひやうし　二上りこれハ江戸よてうたひ
「鎌くらのサアヨウ〳〵ヤレかちうの娘か月にハ九たんのサアヤレ月
にハ九たんのはたをおりますサアヨウ
「そのはたをサアヨウ〳〵ヤレついてさらーてこうやをたのんでサア
ヤレこうやをたのんでそめにやりますサアヨウ
「かた先ハサアヨウ〳〵ヤレむめのをりえだ三月さくらのサアヤレ三
月さくらのさいたところをサアヨウ

「上まへハサアヨウ〳〵ヤレしかのやつぶしうさぎのちよんちよとサ
アヤレうさぎのちよんちよとはねるところをサアヨウ
「下まへハサアヨウ〳〵ヤレわーとれまへとおまへさんとわしとサア
ヤレだいてころんでねたるところをサアヨウ

同手びやうし扇ハあしこれハ三くよぶー也
ひとつふたつーるず

「おさなじみよわかるゝときはあゆやもろこの水はあれ
「さまは五月のぼりかせうぶかわしハれまへにのぼりざほ

同扇びやうしこれハ新製
よあちらず

「ほうゑいまつりハ見事なとよたれも見にゆきゆきなべどつこい人み
なこのよのうさハちらしに上戸のおもひハこれなんめりたん〳〵けい
こをひきつれゆきなべおすなさいぐなかたよりゆけすけかされつと
りもつてしとけないのがさんさ見事ゑ

いたこぶしちかごろ江戸
より流行す

「孫兵衛ごけ〳〵〳〵これをあはせてむまごやいごけャレ〳〵
「孫兵衛ごけむまごやいごけ〳〵これをあハせて十三孫兵へごけャレ
〳〵

「となりのいろりもくろぬり〳〵くろいろりこちのねろりもくろぬりくろ
ねろりャレ〳〵
「となりのちやがまハからかねちやがまこちのちやがまもからかねか
らちやがまャレ〳〵
「なげしにかけたる大なぎなたされがなぎたぞあてゝみやャレ〳〵
「むさし坊べんけい大なぎなたたけも八尺みも八尺ャレ〳〵

今歌妓かならず
これをうたふ

むかし〳〵

「むかし〳〵山のああたよあつたげなぢゞいハ山へ出ばかりよばさま

ハ川へせんたくよるすよすゞめがたなもとの。のりをのこらずくてし
まひ。ばさまハみるよりはらをたて。したきりすゞめでおひはなつぢさ
まかハいや。つえつきのゝじで。のりをくたすゞめどのハこゝらじやど
ざらぬか。チョッ〳〵のこへ。やまこへさと〳〵こへてゆたといの
「かにどの〳〵どこへゆかしやるぞいの。さるがしまへおやのかたきを
うちよやきそろ。おこしものハなんでござる。これかこりや日本一のき
みだんでひとつくだされ御ともうそふはさみのばけものたんゞく
り。石うすよはり。このものどもがつきそひて。さるがさまへおーゆたり。
エイヤアねんのふおやのかたきをうちおふせみなさんいかいおせわ
といちれいしもとのあなへそいりよける○是れ等ハみあさハぎなり。
めりやすハ琴歌よ河東を加味したるやうあるものにて甚雅あり。大坂
尤よし。京ハ大坂をまあべり。又江戸の大こく舞のぶしよて。もん句ハ殘

らず島原のをに直〳〵てうたふなり。江戸の長うたハ音聲うつらず。聞よ
くし。

〔六十一〕 御所うら

京にて見世付ある妓樓ハ。繩手。二條新地。北野。內野。御所うら等あり。これ
らいづれも見せをはる。いづれも賤妓よして。見せ。ハうちつけ格子疊わ
づかよ三四疊を敷べし。二條新地尤多し。御所裏ハむかし御所の下主女。
夜行して色をうりしよし。今ハかゝるをハなしといふ 五條坂等も見世付あり

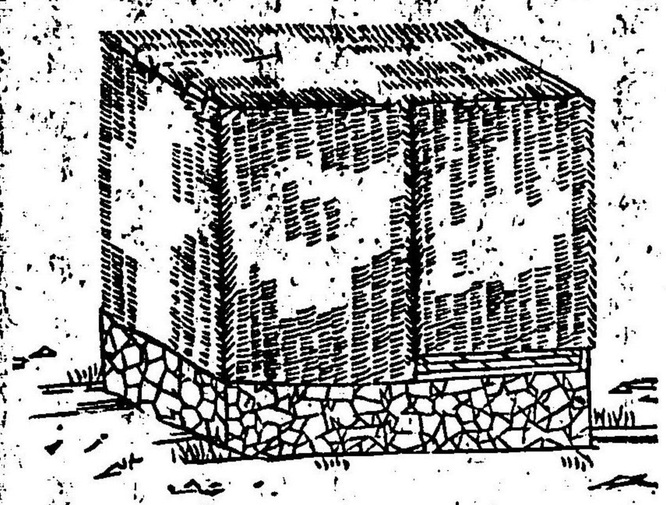
〔六十二〕 つくしわた

先斗町よつくしわたと稱する私窠あり。わたぼうしとも名づく。むかし
わたぼうしやよりこの妓を出せしといふ。今猶先斗町の北角よ綿帽子
屋あり。此綿帽子ハ旅宿へもまねく。又かし坐敷へ一月雇よもするなり。
價いやしき醜婦ながら。その名ハ雅よきこゝ。すべて旅人逗留中。一ヶ月

よ金二分を費せば。一月屋の妾あり。この者飲食に給仕し。又縫刺のをなし。夜ハ枕席をすゝむといふ。是ハ素人なり。どの地尤荒淫なり。太夫天神の外ハ房中滑なし。これ衣服をいとふゆゑなり。太夫天神のみちりめんのしごきしんをしめる大坂又かくのごとし

〔六十三〕 惣嫁

惣嫁ハ二條より七條まで河原の小屋のかはらべいづる。河原よりむしろかこひ一てこゝに夜合す

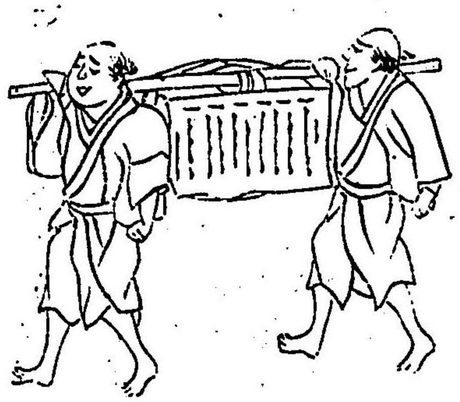


河原の水なき所よ石を高くしそのうへよむしろかこひ三尺ニ一間をするなりひるハとりくずして又夜ハ小屋をかける惣嫁ハ川べたよたゝずみ居て往來の人をひく

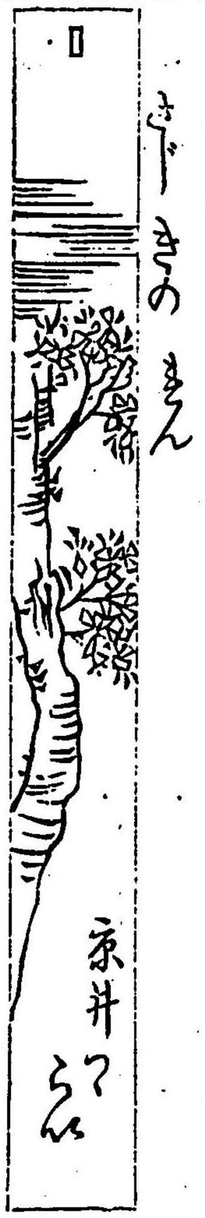
〔六十四〕 四條の芝居

京よて芝居初日の前日にハ。小路〳〵へ太皷を廻すこと江戸の角力の如し。太皷ハ大太皷にあらずてん〳〵からく〳〵となるものなり。芝居はじまれハ朝やぐらにて太皷の先よ掉よ紙をこの太皷を打はりつけ。役わりを書しるしてこれを荷ひありく。そのかたち圖のごとし

四條の芝居二軒江戸木挽町の芝居看板ハ江戸の人形芝居のごとく尤も奇麗なり。芝居のうちに厠あり。花道ハ真すぐにつけてつきあたりに切幕あり。又舞臺の左の方にも切まくありて役者こゝよりも出入す。切落のうへよ簀の子天井あり。切落ハ土間なり。大



入なれバこの所も棧敷並よなる。上下の棧鋪ハ江戸よりも廣く。一ト側九間にすぎず。棧鋪の向ふづらくり形等ありて江戸よりハ立派あり。棧鋪の柱にハ桐の聯をかける。是ハ祇園のげい子おやまよりおくりし物なり



桐の木地の板へ
もあるらしおもと
さいく紀の画あり
下へげのこおもと
の名をしるせり

幕ハ横布なり。水引ハ四方に張てあり。二階さしきの上よも水引あり花道ハ十五六年以前までハ土にて築あげなりしよし。今ハ江戸の如く板よてはれ如此ろぬりのべんとうばこへ入れこれへ椀をそへ

り。辨當ハて持て來る茶くわし番附等うるものハ皆十四五歳

の童なり。雨天の日ハ茶屋の下女草履を持來て客にもたしおき。大切りよ又下駄を持て迎ひよ來る。又客の貧富よらず一幕〳〵に下女來りて用をたす。芝居のうちに厠ハあり。見物のもの外へ出るよれよバず。又闘諍の愁もなし。棧

鋪にハかくの如き挑灯を棧敷のおもての方のまるとみへたり。凡芝居の辨當に燒飯搗りめしハなし。京も大坂も雜劇と妓院と打混じて居るゆゑ芝居の仕出しも多くハ祇園の茶屋より仕出す。芝居茶屋といふもの別になし。初日より四五日までのうちげい子おやま等あらそふて見物す。一日もはやく見るものを全盛とする故よ當分ハ棧敷のうち悉げい子おやま多し。妓ハ必ず客をねだる歌妓ハ十人廿人講をむすびて自分よて見るもあれど是も多くハ客をねだるなり

京よては雨天も合羽を着ず。合羽を着れば人必遠行するとおもへり。これ雨の横よふらずまつ直に降るゆゑあり。ぼてへふりの商人甲掛脚半をつけ。帶を後よてゝめる。「はじかみや〳〵」「なんばんや〳〵」「とうがらゝーやな」などよびありく。これもしほらし車は牛にひかす。人引くとあれバ。一人先にすゝみ縄を輪よゝて。肩にさゝ入レこれをひく後より押すもの又聲をたてず名古屋いせ又かくの如ゝ雨中傘をさゝて駕をゝつぐものあり。予伏見より京よ入る時雨ふれり。予が荷を持し人足傘をさせり。凡八九貫目の両がけをかつぎながら。傘をさして三里の道をゆくと。江戸人のめよハめづらし。京の輕子ハ甲かけ脚半をつけ。帶とゝめ。三尺手拭をしめる。俠者も頷をぬかず。月代の毛を長くせず。身に花繍したるもの一人もあゝ。大坂ハ髪結などにほりもせつた直ゝハ旅を持ず箱なり。或ハ一人二ッの箱のしたるものあり。大坂も又かくのごとし。

男子の羽織二尺よ過ぎず大坂ハ羽折のさがり袖とすりはらひなり。夏ハ白張の日傘をさす。菅笠ハかぶらず。醫師ハ總髪。醫工ハ髪なきもの多し。髪ハ海老尻髷

ねをゆるくして。はけのあひだをすかす。ゑびの尻をまげたるがごとゝ。きんかん元結二ッかけてねをゆふ。このかみのふうもと大坂より流行す。京ハかゝゆひいづれも下手なり大阪におよバず

又醫師の惣髪ハ髷なし。かづら下地の如くも女子ハ他行よかならず帽子をかぶる。衣服その外女子ハ赤きをよゝとす。

追書
伏見よりあらず高槻と喧嘩をとり組たるなり狂言この狂言を高槻騒動と云也

すべて舞臺のえかけと役者の衣服ハ江戸より立派なり。その外ハ替ることなし。予京にありし時七月廿四日より四條北の芝居ハじまる。團藏。嵐吉。嵐吉三郎なりこのもの當時のたてものにて上手也淺尾工左衛門。嵐三五郎。嵐猪三郎。嵐吉市川團三郎。前髪と淺尾國五郎。尾上新七。鯉三郎。澤村國太郎。甚老中村金藏。芳澤いろは。女形たてもの市川團之助。團藏子等ハて繪本太閤記の狂言あり。切狂言に伏見の喧嘩をとりくみ〳〵新狂言三幕にて。嵐吉三郎足輕里見伊助の役評判尤よし大入あり。予ハ八月七日大坂より歸りがけよ見物す。京大坂とも芝居はじまる以前先づ板よ役者の名を背つけてこれを木戸に出す。江戸のあやつり芝居のごとし。是ハ一ト芝居〳〵に役者入かはるゆゑなり。近年京も四條二軒の芝居一所にハ出來ず。うつてがへに興行す。或ハ京のあたり狂言を役者道具建ともに大坂へもちゆきて又興行するとあり。大坂にても又すべて近年三都とも芝居少しくおとろへかくのごとし。

たることこれよてしるべし。役者は多く大坂に住居す。いつれも家作よろしくみゆ。この外いなバ藥師。御靈邊所〻よ小芝居あれど。大坂の中芝居よは及バず。接賓張多し。

〔六十五〕京師の評　附風俗の圖說

夫皇城の豊饒なる三條橋上より頭をめぐらして四方をのぞみみれバ。緑山高く聳て尖がらず。加茂川長く流れて水きよらかなり。人物亦柔和にして。路をゆくものの爭論せず。家にあるものの人を罵らず。上國の風俗事〻物〻自然よ備える。予江戸よ生れて三十六年。今年はじめて。京師よ遊で。暫時俗腸をあらひぬ。

京よよきもの三ツ　女子。加茂川の水。寺社。あしきもの三ツ　人氣の客商。料理。舟便。たしあきもの五ツ　魚類。物もらひ。よきせんじ茶。よきたバこ。實ある妓女。

京よては雨天も合羽を着ず。合羽を着れば人必遠行するとおもへり。て
れ雨の横よふらずまつ直に降るゆゑあり。ぼてへふりの商人甲掛脚半
をつけ。帯を後よてゝめる。「はじかみや〳〵」「なんばんやとうがらゝやな
どよびありく。これもしほらし車は牛にひかす。人引くをあれば。一人先
にすゝみ縄を輪よゝて。肩にさゝ入レこれをひく後より押すもの又壁
をたてず名古屋いせ又雨中傘をさゝて駕をゝつぐものあり。予伏見よ
かくの如し
り京よ入る時雨ふれり。予が荷を持し人足傘をさせり。凡八九貫目の両
がけをかつぎながら。傘をさして三里の道をゆくと。江戸人のめよゝめ
づらし。京の軽子ハ甲かけ脚半をつけ。帯とゝめ。三尺手拭をしめる。侠者
も頷をぬかず。月代の毛を長くせず。身に花繍したるもの一人もあゝ。大坂
ハ髪結などにほりもせつた直ゝハ旅を持す箱なり。或ハ一人二ツの箱
のしたるものあり
を擔ひ一人なほし〳〵とよびありくものあり。大坂も又かくのごとし。

男子の羽織二尺よ過ぎず大坂ハ羽折のさがり袖とすりはらひなり。夏ハ白張の日傘をさす。
菅笠ハかぶらず。醫師ハ總髪。畜工ハ髪なきもの多し。髪ハ海老尻髷

ねをゆるくして。はけのあひだをすかす。ゑび
の尻をまげたるかごとゝ。きんかん元結二ツ
かけてねをゆふ。このかみのふう。もと大坂よ
り流行す。京ハかゝゆひいづれも下手なり大
坂におよばず
又醫師の惣髪ハ髷なし。かつら下地の如くそ女子ハ他行よかならず帽
子をかぶる。衣服その外女子ハ赤きをよゝとす。

京大阪の
老女い黄
京大阪
京大阪町家の婦女
大阪
尾州
京
京大阪
尾州

〔六十六〕 太秦の草紙

太秦の草紙は室町家の時の戯作春書なり。原本は今出川相國寺よりありといふ。うつ〳〵一巻。橋本經亮かたより。もとめよとておこしたりけるが。文面首尾せざりければかへすとてよめる。

太秦のこゝろにかけし紙屋川のはしたものこそうらみなりけれ
返し
君ならで誰かかふへき水よもあらす草にもあらぬはしたものをは

經亮

〔六十七〕 旅の盆 附大文字の火

文月の便りさへ。遠き古郷のとおもひながら。魂まつる頃。なを京よありし。十三日の夕づかた。

旅の盆こゝろに神の來る夜かな

おなじゆふべ。東山えさそはれ侍り。道よりにけかへりてもふしつかはし

けるる

古郷の名よあふ山の東さへものおもふ夜はねられさりけり

かへし

草枕旅よしあれはなきたまもゆるし給えんいさゆきてねよ　經亮

つまや子に見せまほしきはゝ殊更に都のちまた里の名ところ　解

水鳥のゝもの川へに旅ねしてかつきもあへぬころもすゝしき

旅にしてうれしきものは古郷の妹か玉つさへたてなき友

七月十四日の夕よめる

あすのよはをつけやらん古郷のあつまのそらを出る月影

十五日の朝ほらけよよみ〳〵

入る月よ妹かむかひて旅の空にわかめさめぬるころと思はん

十六日大文字の火を見てよめる

子をれもふやみのかたにぞてらすなるひゝしの山のもゝのほかけは

狂歌

かく斗火をともす山の大の字ハ點のうたれぬあがめなりけり

おなーをりに船かたの火

ほの〳〵とあかしをともす夕くれに山かくれなき船をしそれもふ

畑橘洲子法印醫學院畑柳安男通稱柳泰好ニ詩文ヲの話に東山大文字の火ハ延德元年七月十六日將軍義輝追悼の爲はじめてこれをなす。これ冥土光明の故なり。義輝前年正月十六日ヨ薨す。故ヨ今年初てこのをあり。大文字の筆書ハ茲船庵の筆也。そのを今出川相國寺の傳記ヨくをし。世に弘法の筆或ハ横川の筆と云ものみな誤なり。相國寺日件錄にある所のものハ抄書せるゆえこの事みへず。今現ヨ相國寺庫藏中の日件錄ヨハこのをありをにへり。甚だ珍說あり。予先年著述せし俳諧歲時記ヨハ横川和尙の筆とするしぬ。今ヨ至りて遺恨すくあからざりーヨ。よく日又橘洲子より文

通のつひでヨ。大文字火の事慈船庵は存し違ヨて御座ハ。相國寺小補軒横川和尙へ足利將軍命ぜられしなり。小補軒當時荒廢。遺趾而已也 下略

かく申參りたれバ。世間普通の說ヨてめづらーからず。大に興をうしなひぬ。大文字火は十六日夕方より同時ヨ火を點す、誠に一時の壯觀あり、はじめに妙法の火、次ヨ左り文字の大字、次ヨ大文字なり、十六日晝より雨ふり黃昏ヨ雨やみぬ、しかれども今夕大文字は火をともさず、十七日の夕火を點ぜり、その餘はみな十六日ヨてありし、晝ヨりは薪をつみをき、夕かた一時に火を點す、當時は農民の山まつりなり、火を點すればみなあらそふて山を下る、もし久しく山ヨあるものハかならず病むといふ、陰鬼のおのづから集るにや

凡精靈のむかひ火おくり火はミな加茂川に出て麻からヨ火を點ず。その宗旨ヨよりて日限の遲速あり。盆中家〳〵ヨ挑灯燈籠を出すを江戸の如し。東山諸寺の高燈籠は星の如くーかり。

〔六十八〕 六道の模(ヒナ)うり

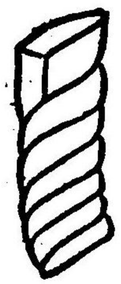
七月九日六波羅及六道の模うり。江戸人にはめづらし。模は高野模にて

かくの
ことし
ふものいあし

諸の人必ず一枝ヅヽ買ふて持佛の花いけへさす。江戸のごとく盆の草市といふものいあし

〔六十九〕しらいと

七月十日清水の四万六千日いとよぎはへり。此邊すべてしらいと餅を賣る。これは挽餅よかくのごとくねぢれり。音羽の瀧の白と黄あり。形しら糸のとある。淫曲よりなづけたるにや



〔七十〕京の盆祭

京よりても盆まつりといふをあれど。江戸のごとくにはあらず。魂棚も机やうのものを設け甚だ簡略なり。さゝげものもろく〳〵せぬ樣子よみゆ。十三日にぼたもちをこしらへる家あり。それも稀なり。盆中囉齋弱法

師のたぐひすべて物もらひ來らず。但六齋念佛ハ大勢ありくなり。六齋念佛ハ洛外の農民等太鼓をあらし。大人小兒打まーりあやーき唱歌をうたひ。市中をありくずげ笠おどわざとやぶれたるをきたるもあり。京にて女兒の盆れとりといふとあるよしきゝぬ。今年近國洪水ゆゑよや沙汰あし。街道の女兒五六歳より十一二歳まで大ぜゐ手を引あひ。源氏目錄の長うたなどうたひてありくと。江戸の盆ゃうたのごとし。是小町れどりなり

すべて京ハ五節句なども。中人以下市中にいたりてハ。式といふて膳部を設けるとハなし。正月も市中松かざりをせず。餅ハつけども。元日只一日汁雜煮をいハひ。鏡餅ハ江戸の廿四文備へほどのすハり只一ッとるよし。萬事の費をいとふこと儉節よ過たりといふべし

〔七十一〕内裡の御燈籠

七月十五日禁裡の御燈籠を拜見よまいれり。この日ハ諸人ゆるされて

禁中へまいるなり。清涼殿の廂に御燈籠をならべて前後警固の役人付そひて一二間こあたより拜さしむ。この日ハ紫宸殿の御門もひらきてあり。是南門より炎上後別に南門あしといふ諸人うちを拜して賽錢を投るものあり。日の御門諸人ハこゝよりうちへいるの外ハ茶店あり。檜垣の茶屋と號す。又公家門の前の茶店も檜垣と稱す。こゝハ江城の下馬先のごとし。茶店ハ甚むさくろしけれど。其名ハおのづから雅なり御燈籠ハいろ〳〵の人形つくりばなをあどくさ〳〵あり。下の臺ハ四角なる燈籠ハて白きかみをはり。上ハ赤と青との紙をつけ。是を四方ハさげたり。

火ハ下ヲとものそこの外數十品あり

火ハ下ヲとものすなり。燈籠ハおの〳〵下ヶ札して。親王家攝家の名をしるし。又女中方とあるもあり。いづれもさゝけものとみゆ。翌十六日それ〳〵へ下さるゝとなり。東西の本願寺も今日とう日ハ諸人に見せしむ　日ハ御門この日八ツ時ごろハひらき。七ツごろに閉る。七ツ過てハ拜見をゆるされず。七月十七日橋本肥後守經亮より消息ーて。禁裏御所御燈籠の造り花きく四五本おくりこされたり。誠ハ一度叡覽をへたる品なれば。おそれ尊むべし。京の町ハてもよく〳〵所緣あるものならねバ拜受するをあたはずとてみなうらやみけり。京の俗の說に。これを家におけば賊入らずといふ

〔七十二〕　りうたう太雨談ハ出たれバ省く

〔七十三〕　せんず萬歲これも同し

〔七十四〕　京の七夕祭

京よて七夕の星の手向よハ。ちひさき鬼灯挑灯をいくつともなく笹のうらへつけ。小童六日の夕かたこれを長き竿のうらよ結ひつけ。その手迹の師の家の前よもちゆき。若て加茂川にもち出これを流す。三條五條ゟ橋の邊へハ流すとを禁ず。故に二條四條の河原え數十人件(くだん)の挑灯をともしつれたるありさま。さながら星の飛こふごとし。短冊え歌を書て笹へつくるともあれど。いづれも挑灯を附ざるハなし。又ハ七月二日三日ごろより家のまへよ燈籠を出し。これに獻二星などの字をかゞもしよかき。上に小なる挑灯を十四五つけて出したるもあり。

そのかたち

二星を祭るの挑灯。七日の夜ながさすして。六日にあがすものハ。京の風

俗なり。すべて京ハ五節供の諸拂等。華の内よかたづけ。とりよ來らざるかけハ持ゐきて勘定し。當日夕方ハ俗事のこらず片付て。夫より遊ぶなり。歳暮も富るものハ廿四五日。まづしきものハ廿七八日までに悉く家事をいとなゝ。正月のとゝのゝ大かた殷おきて。大晦日ハ閑暇よして。今夜祇園けづり掛の神事などへまいるよし。盆土地せまく事少きゆゑに萬事手廻しよし。これよならひて。七夕の挑灯も六日よあがして。七日ハ朝より遊ふと。小童のわざくれとも。れのごから手まハしよきをかくのごとし。

〔七十五〕 地藏まつり

七月廿二日より廿四日よいたり。京の町々地藏祭あり。一町一組家主年寄の家よ幕を張り。地藏菩薩を安置し。いろ色の備へ物をかざり。前よハ燈明挑灯を出し。家の前にハ手すりをつけ。佛像の前よ通夜して酒もり

ありべり。活花扇かけその外器物をあつめて種々の品をつくり。家毎よ飾りをく。町もあり。年中町内のいひ合せもこの日よするといふ。そのありさま江戸の天王まつりの假宮の如し。伏見邊大坂にいたりてまたこれよおなじ。

〔七十六〕 京地の酒樓

喰々堂名ハ謙字ハ貞吉池大雅堂の門人よして書を能もし又畫を能もしふ。頗る風流の人ふりとふ

喰々か家ハ今猶東山にあり。今の主人も茶など嗜むよし。門柱の聯ハ片竹を以てつくり。我酒妙々天下妙。伊丹燗白價不渝。の數箇字をしるしたり。うの外のものハ板面磨滅してよめず。こゝよてこんよやくの田樂名物なり。麩もよし。喰々が時ハこんにやく一種なりけるよし。今ハこのめハ外の料理もするなり。○祇園の梶子が茶店今ハ跡ふし。○大雅堂ハ。東山雙林寺中長喜庵の向ひよあり。是ハ七八年前に建し所なりとぞ。料理をして鬻く。瓦にハ大雅堂の三字を篆して。家の作りも甚だ俗ふれハ。案に相違して人に問ふよ。むかしの大雅堂ハ祇園のかたはらよありしが

類燒せり。今のあるじハ歌妓あるよし。空しく大雅堂の名をおかすといふ。いかさま家作二階等の物數寄。その俗あるを丸山の料理茶屋よりおとれり。

○丸山の料理茶屋のあるじハ。法師よて肉食妻帶あり。いづれも何阿彌と稱す。座敷庭奇麗あり。料理もよし。浮瀨ハおとろへて僅よ一軒あり。大坂の浮瀨ハ猶繁昌せり。

○生洲ハ高瀨川をまへよあてたれバ。夏ハすゞし。柏屋松源あどはやる。柏屋ハ先斗町よも出店あり。松源近年客多し。こゝよて鰻鱧。あらひ鯉名物といふ。魚類ハ若狹より來る鹽小鯛鹽あハび。近江よりもてくる鯉鮒。大坂より來る魚類。あつハ多く腐敗す。鰻鱧ハ若狹より來るもの多し。さかれども油つよく。江戸前よハおとれり。鮎鮠ハ加茂川にてとるもの疲て骨こハし。鮠ハよし。若狹の燒鮎よしといへども。岐阜あがら川の年魚

あどくふたる所の口にてハ中〳〵味あし。鯉のふくせうも白味噌あり。赤味噌ハあし。白味噌といふもの鹽氣うすく甘ッたるくしてくらふへからず。田樂へもこの白味噌をつけるゆゑ江戸人の口よハ食ひがたし。鰻鱧ハ大平あどへもる。小串ハ燒て玉子とぢよりもせり。大魚の燒物ハ必片身あり。皿の下にある方の身ハそきてとり。外の料理よつかふを大坂も又かくのごとし。京ハ魚類に乏しき土地あれバさもあるべし。大坂よて片身の濱燒あと出すといかよぞや。是おのづから費をハぶく人氣のさからしむるものか。京よて味よきもの。麩。湯皮。芋。水菜。うどんのみ。その餘ハ江戸人の口よあハず

○祇園豆腐ハ。眞崎の田樂よ及ず。南禪寺豆腐ハ。江戸のあわ雪よもおとれり。さかれども店上廣くして。いく間よも出きり。その奇麗なるをハ江戸の及ぶところよあらずすべて京の茶店ハ。四方一間位づゝよ出きり。

左右にをたれをさげたり。名古屋の七ッ寺の酒店もこれをまなべり

○祇園は孔雀茶屋あり。もろ〳〵の名鳥多し。名古やの若宮八幡前近年孔雀茶屋を出せり

○大佛餅は。江戸の羽二重もちに似て餡をうちよつゝめり。味ひ甚だ佳

ありういろうちまきといふものは。黒砂糖製にて。よからず。その外安もの。挽米のやきもちあり。上菓子はよしといへども價大は尊し。

〔七十七〕 河原のすゞみ

納涼は四條二條の河原よし。四條には義太夫或は見せもの等いろ〳〵あり。二條河原には大弓楊弓見せ物もあれど。四條尤にぎはへり。ゑかれども河原は壹の炎暑は石やけて。ほてりいまださめず。流れに水みちて。人すくあければ。かへりて二條四條はまされり。紀はも茶屋酒店等川床凡を出し。種々の料理をひさぐ。四條二條は茶店のみあり。納涼の人辨當をもち來りて。河原はてひらく。すべて京師の人は遊山にかあらず辨當をもちゆくなり。貧しきものは竹の皮に握りめしをつゝみてもちゆき。店物はくらはず只店上のものをくらふものは。旅客と祇園の嫖客のみ。ゆゑは物みな價尊し。

茶店の茶いづれもわるし。すべて一人三四錢の茶代をつくゑふゆゑあり。清水智恩院邊の茶店は。素湯は香煎なり。○紀のすゝみは壹あり。夜は茶店あし。是道遠き故なるべし

〔七十八〕 京都の節儉

京はて客ありて振舞をするは。丸山生洲。或は祇園二軒茶屋。南禪寺の酒店などは。一人は價何匁と定め。家内せましと稱して。その酒店え伴ひ行。是別段は客をもてなすの儀はあらず。家にて調理すれば。萬事に費あり。その上やゝもすれば器物をうち破るの愁ひあり。故はかくのごとくす。京の人の狡なるを是にて知るべし。

〔七十九〕 洛外の古迹 附近江八景

七月七日。むらさきの。上賀茂。北野へまいれり。北野は。

思ふをかみはうつーてねきまつる松の葉の筆梅か枝の軸

歸路千本にて。雷はたゝかゝりて。夕たちぬれば。づぶぬれはぬれてかへ

りぬ。

○下賀茂柊明神には柊の木多し。志願成就の人は必ずこの社頭え柊をたてまつる。たとへ餘の木をもてきて植るといへども。程なく化して柊となる。予七月八日賀茂より遊びけるに請ふて。もつこくの半柊に化したるを一枝手折てかへりぬ。その外南天つゝじの柊より化したるもありしが。或は枯れ或はのこらず柊に化したる故手折らず。かゝる神木をいたづらに折らんこと。おそれあきよしもあらねど。携へかへりてその奇瑞を人に見せなば。遠きあづま人もいよゝ信をまさんとうたがひなければ。此よしを神につげ奉りて。これを手折れり。

手折とも神やゆるさん久かたのひらきかさしてかへるあつさよ

○七月九日宇治へゆきけり。今日上醍醐。下醍醐。邊。稻荷山。ふじの森。深草。東福寺。黃檗など。道すがら一見す。八幡山崎邊洪水よていまだ道甚あれ

落柿舍は俳人去來が住し草庵ありて人名は兼時といい

たり。宇治橋は三段に切れて落。通圓が茶店は床上四五尺も水つきしと見ゆ。興聖寺。平等院。洪水おし入て。路難儀あり。離宮は高き故水難なし。橋姫の宮は流れて跡なし。

○和泉式部が稻荷山にて古題をすしたりといふもみぢは山上七八町おくの谷間にあり。古木なり。地理を思ふに田中の社のかへるさとあれば。昔の木にはあらざるべし。

○七月十一日嵐山に遊び侍り。渡月橋も近日の洪水におちて。川上七八町まはりて渡し舟あり。大井川の石。及び紙屋川の石などすこし拾ふてかへりぬ。秋暑にたえざれば。終に佳品を得ず。この邊の石細長くして文鎭となすべき物あり。

○嵯峨にてうれしきもの。廣澤の池とあらし山なり。廣澤は佳景なり。嵐山は絶景にて侍る。

○さがの落柿舍は。二尊院より四五町間道藪の中にあり。土人もしらず。

ふ長崎の人向井元升が二男にして若よりかりし洛に牛翁芭蕉の風流を学ひて俳諧に名あり寛永元年九月没す

今ハもる人もなくて。その地主も農民の得となる。座敷二畳勝手一畳甚だくづれたり。

柿の樹や月はかりもる秋の庵

○見てうれしきもの。八瀬大原の黒木うり。鞍馬のつるめそ。大原女のさかさ脚半ハ。むかふすねの方にて脚半をあハせはくなり。女の牛馬を率てゆきゝするさま。まためづらし。

○見てねどろかれぬるものハ。東西の門跡なり。奇麗荘観言語同断。誠よ美盡して世界の金銀もてゝにあつまるかとうたがハる。ゑかれども黄檗の雅よゝてさびたるにハおとれり。

○見て尊きもの。禁中ハさらにも云ず。上下加茂の社。公卿の參内

○見てやさしきもの。かつぎ着たる女。

○見てすゞしきもの。だゞすの御洗井。かも川の流れ

○出きゝよハ。真葛か原よし。嵯峨ハ野々宮邊尤よけれど道遠ければわづらハし。

○河鹿ハあらし山の麓大堰川よてなくよし。いまた時候はやければ聞ようえゆかず。

○鳥部山ハ。今もあハれなり。此邊袖乞多し。御廟野もいとさみし。東西の大谷甚立派なり。

○ゑる谷越ハ。いつも山水山路よ流れ出て名の如し

○妙心寺の松ハ甚だよし。四方え枝をうつを十四五間ゑかれどもから崎の松よおよばず

○鹿苑寺の金閣ハ甚だ古雅なり。義滿の像生るが如く威あり。よき石あまたあり。瀧ハわろし。金閣拝見の者、一人より十人まてハ銀貳匁なりこれを寺僧よ投ずれハ。則庭の門をひらく。東山銀閣寺もまたかくのごとし。

337610

○智恩院の傘ハ今猶骨ばかりよなりて。本堂の右の方の軒下にあり。
○大佛の鐘も大けれど。智恩院のかねまされり。かたちひらたくて。雅ならず鐘の響よきハ祇園是第一なり。
○大佛の燒跡。その大さと見んと。柱のかなものと礎と佛の臺坐のみ。耳塚を見てハ昔をねどろき。太閤の廟を見てハ昔をしのバれ侍る。この邊町家のうしろにある繼信忠信が塔。苔むしていとあハれなり。
○三十三間堂の觀音。諸のとく數多し
○高臺寺の萩ハ。大坂より歸路京に來りし時見たり。
○近年京よてはやり神ハ。赤山明神と。深砂大王なり。赤山ハ叡山の麓きら、越の丑寅三四町よあり。深砂ハ上醍醐にあり。此神去年開帳已來のはやり神なりといふ。神體鬼形畫幅なり。是三十番神のその一なりといふ。祇園のおやまげい子奉納の挑灯あまたあり。

○七月十二日小倉山よ遊べり。楓もいまだ青みがちよてありき。一木ふた木梢の少し色つきたるをやう〳〵手をりて笠につけたりしに。道よておとしてうしなひぬ
すべて京都の神社古迹等ハ古人もこれを抄出し。又近ごろ都名所圖會といふものに圖說くハしけれバこゝに出るさず。只おのれがこゝろよよしとおもふ。とのみ。少しく書付にくのみ。
○近江の三上山ハ出來のゐるき小富士なり（かくの比良ハかたちをし）
かくのをし。叡山愛宕尤もたかく見ゆ。
○七月廿一日未明に木屋町の旅宿を出て。から崎の松見よゆきけり。吉田の神社を道すがら拜し。白川越よかゝり。峠よて湖水を眺望す。白川の水にて石をきり出す。世よいふ白川石これあり。山中所
八景やとほく見るほと秋のいろ

凡そ湖水ハこれまで予がめよふる所の住景なり。就中白川の峠よりこれをのぞみ見れば。左よ若州の諸壑遙よそびへ。むかふよ伊勢近江の山々波濤のごとく。足下よから崎を見れろし。左に三井大津粟津石山等見ゆ。矢走片田の邊。晴れたる日ハかすかよ浮御堂も見るべし。書くとも筆に及びがたく。述るとも詞に盡すことあたハず。湖ハ涙をづかよして席を布るがごとく。船ハ帆をあげて一葉水よ浮ぶがごとし。山水の奇絶こゝよ於てむなしく口を閉づ。

○から崎の松ハ北より南よさす枝凡三十間ばかり。東より西にいたり廿間餘。みきハ三かゝへよわまり。木の丈け高からず。まん丸よ茂生す。是亦天下の名木。實よ一奇觀といふべし。

傳よ云、から崎の松かれたりしを、明智光秀植かへたり。一時わか外よたれかうへけん一ツ松こゝろしてふけ玄賀のうら風、その後これも枯たりしかば長嘯子またうへらる、これも又かれて、今の松ハ火坂加番の諸侯某氏うへられし所ありといふ松のめぐりの岸に石垣をし

ていと嚴重なり、近年松枝玄だいに垂茂するを以て石垣をつき出すこと度〳〵あり。といふ、是みな公儀御入用よて修理し給ふ。松の前西よ辛崎明神の社あり、小社なり、

或人の云、前の說ことく〳〵く非なり、から崎の松ハ已に四百年におよぶか、その間叙山の記錄にありといふ、いかさま木たちのさま百年來のものよハあらず、傳記あを考ふべし、

坂本山王に詣るよ便りよけれど。秋暑甚〳〵く歩行よたへず。から崎より遙に山王の宮居を拜し。舟よのりて三井寺へ參る。これより石山へ二里半あり。終よゆかず〳〵て京にかへりぬ。

〔八十〕 かし家の札

京よてかし家の札ハ。必ず子供にかゝせて。札を横に戸へはりつけをく。かくすればその家はやくふさがるといふ。何も玄なるとを玄らず。

〔八十一〕 京市中の喪附名古屋伏見

京よて忌中よハ。店上よ黒き暖簾をかける江戸よて簾をかける類なが
ら。黒ハ喪服の色なれば簾よさされり。忌中の札あし。無地の暖簾をかく
てみだりにいらず。名古屋にて市中の葬禮よ棺槨を禁ず。駕に白布をはるなり。伏
見よてハ棺甚立派なり。棺を擔ふ者よ至るまで。悉く上下(カミシモ)を着す。四方に
紙の天蓋幡等をたて。上下を着たるものこれを捧て持あるき。鉦太鼓を
鳴らし。法師兩三人棺の先にたちてこれを導く。身分よろしきものなら
ずともかくのとし。是土地の風俗あるべし。

○伏見の桃山よて。名のきれぬきのこ見て行山路かな

〔八十二〕 女兒の立小便

京の家々厠の前よ小便擔桶ありて。女もりれへ小便をする。故よ。富家の
女房も小便ハ悉く立て居てするなり。但良賤とも紙を用ず。妓女ばかり
ふところかみをもちて便所えゆくなり。月々六齋ほどづゝこの小便桶をくみよ來るあり、或ハ

供二三人つれたる女。道はたの小便たごへ立ながら尻の方をむけて小
便をするよ耻るいろゐく笑ふ人あし。

〔八十三〕 女子のぼうし 附伊勢尾張

京大坂伊勢よて。女子他へ出るよハ。かならず帽子をおく。尤帽子かたち
少しつゝかハれり。圖ハ前よ出ず京大坂の綿帽子ハ結ばず。そのさまくらげの
化物の如し。名古屋ハ綿をかぶり(ゐる)腮(あご)の所よて結ぶ。いよ〳〵見ぐるし。京
にて三十以上の女ハ淺黄帽子四十以上ハ藤色の帽子。老女ハ紫或ハ黒。
是京の風俗なり。凡女子の帽子をつけることいよしへの遺風なり。見ぐ
るしといへども。江戸の女子の素面にて他行するにハまされり。

〔八十四〕 粟田の陶器

京都の陶ハ。粟田口よろし。清水ハれとれり。白川橋に松風亭といふ店あ
り。大坂蒹葭堂このみのこんろきうす等を製す。又一軒旭窯といふ店あ

り。宇治の通圓が店よりひさく茶碗を製す。この二軒器物をかゝーきもの多し。

〔八十五〕 京師の人物

京にて今の人物ハ皆川文藏と上田餘齋のみ。餘齋ハ浪花の人也云かれども文藏ハ德行ゆゑらさるよし聞も。秋成ハ世をいとふて人とまじハらず。蘆庵ハ古人となりぬ。書ハ月溪と雅樂介のみ。蘆庵應舉尤もをしむべし。

凡京師の文人。見識甚だ高上。情才よ過たり。文學の事京師の外みゆ村學と稱す。云かれども是と說話するよ。三ッのうち二ッハ甘心云がたきを多し。夫都會の人氣れのづからみるかくのごとしといへども京師尤も甚し。文人多くハ風狂放蕩。是また此の地の一癖のみ。京の人よ滑稽なし、脈とのゝむべなるかゆはせをも、蕎麥と俳諧ハ、京の地よあハずといへり、

○京よりあり一日。へだゝるをおりて人のもとへよみてつかハしける。

契りおきしそのゝの葉もあたーのやかれゆく人のふみもかよハし

○今上方よて人口に膾炙する歌。

みのゝくよ熊坂物見の松かれたりけれハよめる　秋成

風さハくみとりのはやー根をたちて戸さゝぬ御代よあをハかの宿

おなーこゝろを　杏花園

くまさかの物見の松もかれよけり何いたつらよとしをぬすまん

韓信か市人のまたをくゝるかたかけるよ　秋成

末つひに海となるへき谷水も云ハしハくゝる松の下よけ

この歌蘆庵ゆりともいへり。未詳。蒿溪云、この歌ハ、伏見中松島の隱士學るなりといふ下の句を單か歌にて、云ハし水の葉のーたくゝ蘆庵か添削云たるなり、

○本居宣長。三夕の中定家卿の歌を難して云。見わたせハ花ももみぢも

なかりけりといふまでハ。海邊のこゝろおかりけれバ腰折なり。もし見わたせば花ももみちもなよは津とし給ハゞなきをなよハよかけて浦とつゞき。海邊のこゝろ上の句よふくませて拔羣ならんといへり。これら今いひもてつたへて賞しぬ。

〔八十六〕 嘘譚の名人

齋藤文次元御所官人日向介といふ人。虛談をもてよく人をわらハしむ。四條高倉ニ住す、

去年七月高槻の町ニて。色情の遺恨をはらさんため。盆おとりニて群集せし夜。七十人ばかり人をあやめたることのあり。そのころ京ニて此話まちく なり。文次友人のもとへゆきてかたりて云く。高槻に通家(エンシヤ)あり。きのふ申きて喧嘩のことをきくニ。疵つくもの僅ニ三人なりと。是實說なりといふ。人おもへらく七十人ハあまりニ多し。この話のみ文次其實を得たりと。明日高槻より人來る。則喧嘩のををきくに。疵つくものじつに七十人。悉絶倒す。

文次嘗て友人を訪ふて云。時初春にして世上詩歌管絃の會初あり。僕も又陸のつき初をすべし來る十一日午時よりおのく 打つれて拙家へ來臨ニ給ふべしとかたく約してかへりぬ。友人ハもへらく。文次虛談の會初ニハ何をいふやらん聞ずんばあらーと本日各打つれてその家にいたりて案内をこふニ妻はしり出て云文次ハ今朝より他行と悉絶倒す。

西村定雅話、文次今猶高倉ニあり、

〔八十七〕 應舉が臥猪 此條雨談ニ出たれハ省く

〔仝〕 京の浮世繪附澤庵畫賛

祇園ニセイビといふ畫工あり。おやま藝子の似かほを書てこれをうれり。妓及戲子(ヤクシヤ)の似かほを錦繪ニして多くすり出すを近年の新製なりニかれども江戸ハにしきゑに及ズ

○予が旅宿せゝ泉屋麥雨が妻歌妓の圖を畫て賛を乞ひければ

かねかすむ春の夜遊ようたひめのちりかゝるとき花も數うふ

自注よういハく、花とハ揚代なり、四寸ばかりの線香三本たてゝ、花一ツとす、晝夜よて花三十、朝六ツより暮六ツ迄花十二なり、夜も又おなじ

○京をたちける時

ものともよかもの川へよ涼とる都の手ふりわするなよ君　經亮

かへし

爵してそしらるゝともあすよりハはなひるたひに君を思ハん　解

○京よて見たりゝ澤庵和尚遊女の賛

佛ハ法をうり祖師ハ佛をうり末世の僧ハ祖師をうる汝ハ五尺の身を賣て一切衆生煩惱をすくふ色界是空空界是色柳ハみどり花ハくれなゐ

水の面よよゝ〳〵かよふ月なれハこゝろもとめす影も殘らす

是ハよく人の去る所なれと是はらくこゝに去るしおきぬ

〔同〕　淀の洪水　檣木町の噂

七月廿四日京を發ゝ午時伏見より船よ乘りて大阪へ下る泉屋麥雨同行今夜五ツ半時頃大阪へ着岸この間所々洪水の跡を見て駭然なり淀八幡邊所々の堤崩れて今專ら杭をふり土を運びて普請す淀の城の塀ハ屋根際よまて水つきたりと見ゆ淀ばしハ柱二本ながれて橋桁二所まで落こみぬ水車ハ流れてその跡僅よ殘る高槻の城又かくのごとしといふ枚方より二里ばかりあなた黠野仁知（シヤノニヲヂ）の間堤大よ切れて水突流し南平野村よいたり東駒が嶺の麓よ及び西城際よいたり北澱河よ連り一面湖となりぬ黠野ハ既よ河内よ屬す この邊川高く陸卑し故に水勢退くことなく今に至りて濁水丈餘はじめ水至る時樓屋梁を沒し樹木梢を洗ふ村民丘陵に登り或ハ隄防よ集る四方悉く怒波兒女號哭の

蟄天より遍し。民屋水面に泛ひ。ゥの中尚燈し火熒々たるもあり。亦老幼五六人大木より攀(ヨヂ)その根拔て流るゝ者あり。亦その子を畚(フゴ)の中よおき。樹の上よかけたるものあり。幸に逸れて一命を全ふするもの十が一二のみ。こゝに於て官命あり。舟人をしてこれを極(スクハ)しむ。云かれども水勢暴漲。舟至りがたき者あり。官京橋の側より數十間の假屋を作り。又道頓堀の雜劇(シバヰ)五ケ所アリ一ハ當時その破損を修理してあり中より流氓(ヤドナシヒヤクセウ)を入れかる氓集るもの四千人。則倉を發してこれより資給し給ふ。浪華の富商も又貯財を出してこれに施行す。大小一あらず。大阪八軒家邊水床に及び。天滿天神橋その余の小橋損するもの三ッなり。二十日ばかりにして水やうやく減ず。氓故地よかへる。云かれども決(キレ)口より水入て田地濁水中にあり。或ハ砂礫畊すべからず。黙野より西數十町堤より竹を柱とし藁を屋根とし。僅に雨露をふせぐもの數百人。伏見大阪の客船往來するものあれば。十三四歳の童。小舟に棹さし來り。桶をふねの中へ投入て錢を乞ふ。旅客泫然として袖を濕(ウルホ)し。則錢をその桶にいれてこれを流す。乞者の舟下流よりてこれをとる。かくのごときもの一夕數十艘あり

○凡伏見より淀まで。河水決口に入るを以て流れず。或ハ砂礫一所よあつまりて洲(ス)となる。こゝを以て舟自由あらず。淀より枚方の間。水津の水おちあふて急流日頃に倍せり。黙野より八軒家より至りて。水又淺く流れず。故より舟人河中より入て舟を押す旅人もちゥらあるものハ。共より河中に入てこれをたすく。

○枚方の河中にて酒食をうる船ハ。餅くらハんか酒くらハんかといふ。云かれども今ハ大より罵らず。この邊すべて言語尤も野鄙なり。

○伏見橦木町の妓樓。今ハ大におとろへて。郭ハむなしく菜園とあれり。

○吾妻屋(ウ)とかいへる妓樓只一軒のこれり。是さへいましへのさまにハあ

らざめれど。僅にその遺跡を見るのみ。槌木町の妓樓より、赤穗義士のふみを墨本よりて出すよりて聞ぬるまゝ、人よたづぬるに今いかゝることを聞ずといふ、槌木町かくまでおとろへたればその妓樓も今いづち行けん伏見よりなる人なければくはしくたづねもとめずしてすぎぬ

〔八十八〕 八文字屋自笑か噂 附其碩 これより大阪の話をなるす

八文字屋自笑ハ。不文の俗人にてありしが。うのころ京都より南嶺といふ人ありて。いろ〳〵の戯作をあらはし。自笑作とーて出板しけり。自笑といふ名も。この南嶺がつけてやりしあり。外にまた一人作者あり。その名をわすれたり。其碩か この作もまた自笑作とーて出せり。故より自笑作とあるもの。實に自笑が作よりあらず。自笑ハ戯作あど出來る人よあらず。そのころハ八文じ屋繁昌して業用尤もせわし。只射利の俗人なり。かゝる例をかふて俳優の評判記等。今も猶自笑作とーるせり。ふ文の俗人にして高名とあること此人の幸あり。橋本經亮のたなし。

大阪の盧橘ハ元京の人あり。かの人の話にいはく。其碩ハ京都大佛もちの元祖なり。この餅世に賞翫せられて家富けり。其碩才學ありて。よく戯作をあらはし。これを自笑よりあたへ。自笑作とーて出板しけるに。うの本大に世より行はれ。自笑利を射ることゝ〳〵。其碩も密に後悔し。且名利をもとむるこゝろやありけん。のちよハ自笑其碩兩作のおもむきにして出板しけるが。その後故ありて自笑其碩確執に及びぬ。よつて其碩りの子より江島屋市郎右衛門 其碩實名 の名をゆづり。これより書林をさせて。其碩が自作の草紙を多くほりしよ。甚不幸の人よて。其碩一作として出せーー本ハ更よられず大より損をしたり。はじめ自笑が代作ハ。この其碩がえたりーとハ相違なし。又南嶺といひし人ハ。國學にくわしき人よて。其碩あどが及ぶところよあらず。この南嶺も老後より戯作をして。自笑が作とし出せーが是ハわづかの間あり。又自笑も少しく才あり。戯作のでき

再按するに南嶺ハ多田兵部後ヨ桂秋齋と改名せし、ゑせ國學者の事なるべし、

ぬといふ人ヨハあらず。其碩と絶交して後ハ。自笑がみづから書しもあれど大かたハ諸方の合力ヨて高名ヨなり一人なり。此説れもしろしゑ碩などが及ぶところにあらずといふ説ハうけがたし、今も南嶺ハ其るせ一草紙たまさか見ることあれど、中〳〵其碩が右にいづるものにあらず、この説のごとくならバ、其碩ハ一個の戯作家也、大坂ヨて其嶺かも沒年等ゑしる人なし、京の大佛餅その迹といへども、これも今ハ株を他人ゆヨづりしヨや、京にてきかざりしかバ大坂ヨてハゑる人たへてなし

八文字屋自笑ハ藤原姓にて安藤氏なり、自笑ハ京二條寺町本覺寺に葬れり。今の八左衛門ヨ至りて四代なり。自笑ハ延享二年丑十一月十一日ヨ沒す年八十餘 先年京都にて類燒して後。今の八左衛門ハ大坂心齋橋筋安堂寺町に住て。かすかなるくらしヨみゆ。予かの家ヨたづね行て。自笑が傳記等をたづぬるに。別にいひ傳へたるともなしといふ。當時の役者評判記ハ八左衛門自作あり。江戸の卷ハ本町の大橋氏えらめり。元祖自笑が説。近ごろ江戸の蔦のゝら丸が高名ヨあり一趣とよく似たり。元祖自笑、その子瑞笑、是ヨりまた自笑と稱するのみ

にて作文なし、今の八左衛門は年五十有余ヨみゆ是又戯作などできる人物ヨあらずゑかれども當時の役者評判は自作ヨすといふ、宜なるかな近年評判記のおとろへたるとをこれらをもておもふヨ、元祖自笑か説よく符合せり、

〔八十九〕 奴の小万が傳

奴の小まんは。本名をゆきといへり三好氏。今尼となりて正慶と號し。難波村ヨ隱居す。大坂長堀木津屋といふ豪家のむすめなり。今長堀銅吹處いづみやの隣に大なる明屋敷あり。此所正慶小まんが家ゐりしといふ。難波人の話にゆき十七八歳の時より。みづから誓ふて嫁せず。夫をむゝへず。そのころの世話に。もきまとに男をきらふヨはあらず。是は故ありておのれがれもふ男ヨそはれぬ故に。男きらひなりといひしとぞ。ゆき俠氣ありて。又書をよゝ手迹をよくす。つねに大坂中を往來するに顔ヨ墨をぬりうのうへヨ白粉を施し。異形のかたちヨ扮(イデタチ)てありきゝと也。是その男子にまみへざるこゝろざしをしめすなり。ゆゑヨそのあざ一日は頰ヨあり。又一日は額にあ

り。こゝをもて世の人やつこ〳〵と呼べり。程經て京都堂上家の被官浪人し大坂よ來りてありしを扶助し。これを男めかけよして難波新地の邊よ住ゝめをき。折〳〵ゝよひてたのしめり。後かの男義にたがふをわりければ。ゆき怒りて忽追出し是より又ふたゝび男よなれず。そのころ惡黨無賴の某といふもの法をおかすをあり。このもの大坂よかくれ居といへども。そのありかをあらず。こゝよ柳里恭柳澤權太夫ひそかよゆきをかたらふて。かの惡黨をさがさしむゆき程なくかの惡黨をとらへて官府に出せり。かゝることより芝居狂言に。奴の小まんとて作りしなり。秋成が書るものよゆきがゝそか男を。柳里恭なりと記せしは。甚非なりといへり。

按するよ。柳里恭の事年代相當せず。これハ元祿年間大坂よ奴の小まんといふ女俠あり。それを混じていふなるべ。正慶ハ享保七年にう

まれ。享和二年よ至て七十四歳とぞ

八月二日予難波村よたづね行て正慶尼を訪ふ。正慶尼ハ奴の小まんか法名この日盧橘同道。則同村の醫師錄田氏よ就て謁を請ふ。正慶木津よ家ありしが。居をゝめてハ人の往來わづらハしとて。その家を木津の菩提所よ寄附し。難波村よ來り人の家に寓居すといへども。つねにその所をさためず。錄田氏人をはしらせしばらくよしてたづねあひぬ。みづからいふ年七十四と。顏色既よ老衰すといへども。猶いよしへの餘波見也。歩行動搖いまだすこやかなり。一体世をいとふこゝろあるをもて。人書をのぞめども猥に書ず。予對話して扇面を乞ゝよ。こゝろよくうけひきて。詩一篇と連歌の發句とを書り手迹甚だ美事なり。

金城春色映丹霞　活氣和風到萬家
潰笑宴然樓上興　捲簾先見園中花

早春　三好氏婆
正慶　草

又

月落て松かせ寒き野寺かな　丁女

詩も正慶草とあれバ自作とみゆ。言語おのづから俠氣ありてみづから正慶

いふ老婆が忌きらふもの酒客と猫なりと。好車のものたまくこれを愛す。前年蒹葭堂みづからの用墨のかたよこの正慶に書しめ。蒹葭堂みづからこれを題書す。蒹葭堂形の墨とていまなを大坂より正慶へ画もできるなり。云かれども画へいよくへ人のもとめに應ぜず。大坂の人もその名をよばず只奴の小まんとのみよべり。按ずるに奴の小まんといふ女俠元祿の頃よりそれを似たれバ正慶が禪号とするなるべし。

〔九十〕　近松門左衛門が傳　附墨跡

近松門左衛門は。越前の産とも又三州の産ともいへり。今の並木正三が戯材錄に云。肥前近松寺の僧の話に云。近松門左衛門はもと。肥前唐津近

松禪寺の小僧なり。古澗と號す。積學に依て住僧となり。義門と改む。徒弟あまたありしが。所詮一寺の主となりては。衆生化度の利益うすしと大悟し。遂に行脚に出ぬ。そのころ肉縁の舍弟。岡本一抱子といふ儒醫。京よりけれバこれに寄宿し。還俗して堂上家に奉公し。有職の事も大かた記臆せり。後浪人して京都淨瑠理芝居宇治加賀掾井上播磨掾岡本久彌角太夫抔の淨瑠理狂言を著述せしが。そのゝち竹本義太夫にたのまれ。出世景清といふ新戯文を書り。是レ近松が義太夫戯作のそしめあり。是よりして數十部の作ありず。すべて近松が作は。勸善懲惡をむねとし。衆生化度の方便を戯文中にこめたり。是近松還俗の日發願ゐおもむきによるかといへり。義太夫が作者とありて近松氏を名乘るを。近松寺にありしいにしへをゐすれざる微意よや。文中採要愚云。この説によれバ。かの三井寺門前近松寺破戒の僧のうちありといふ説はたがへるよや。二代め

義太夫が墓は千日寺にあり。則國字を以て略傳をしるせり。文中に元祖義太夫が傳も少しのせたり。末に元祖義太夫が墓はしる人なし。予正三出す。を訪ふて近松が墓所を問ふに正三もしらず。久々智の廣濟寺の過去帳に戒名あるよしをかたれり。よて正三が耳底簿をかりてこれをうつす。

久々智は神崎の隣村なり。

久々智廣濟寺過去帳

阿耨院穆矣日一具足居士　　俗名近松門左衛門

享保九年甲辰十一月廿二日

阿耨院の法號ハ近松みづからつけおきし也そは辭世の詠草中に見ゆ

○大坂金屋ばし銅吹所熊野屋彦九郎所藏近松門左衛門辭世の詠草紙中

竪一尺許、横二尺許、手迹は家流の如くみゆ、文字も肉筆の通りにこれをうつせり

甲冑の家に生れて武林をはなれ三槐九卿に咫尺しつかへてす

爵なく市中にさまよひて商賣しらす隱に似て隱にあらす賢に似て賢ならす世のまよひもの神釋儒道和歌有職弓馬郢曲歌舞滑稽まて事しりかほに一生をいひちらし今はの際のいふへき興の一大事半言もゐき倒惑至愚の甚しき心に心の恥おもへはあふなき我世經に氣らし

それに辭世さてもそのゝち數ゝに

殘す櫻のはなしにほはゝ

近松門左衛門杉森姓信盛

號平安堂巢林子

阿耨院穆矣日一具足居士

又同人所藏美人の贊紙中竪二尺餘横一尺許

樂天々意中の美人ハ夢のむつ言　　當は土佐衛のとくみゆ

僧正遍昭の詠中の戀ハ給よかける女
とりかたにはとれかこれか　作磨公

物いハすわらハぬ代にりん氣なく
衣裳表具よものこのみせす　平安堂近松七十一歳　狂歌焉

これも文字ハ肉筆のとし近松が肉筆ハ大阪中よ只この二幅のみなり
といへり

〔九十一〕西鶴が墓誌

西鶴が墓ハ大坂八町目寺町誓願寺本堂西のうら手南向よあり三側目中程
七月晦日盧橘と同道にて古墓をたつぬ。ばらず西鶴が墓よ謁す。寺僧
もこれを去らざりし樣子あり。花筒に花あり。寺の男に何ものが手向た

ると問ふよ。無縁の墓へハ寺より折〳〵花をたつるといふ。

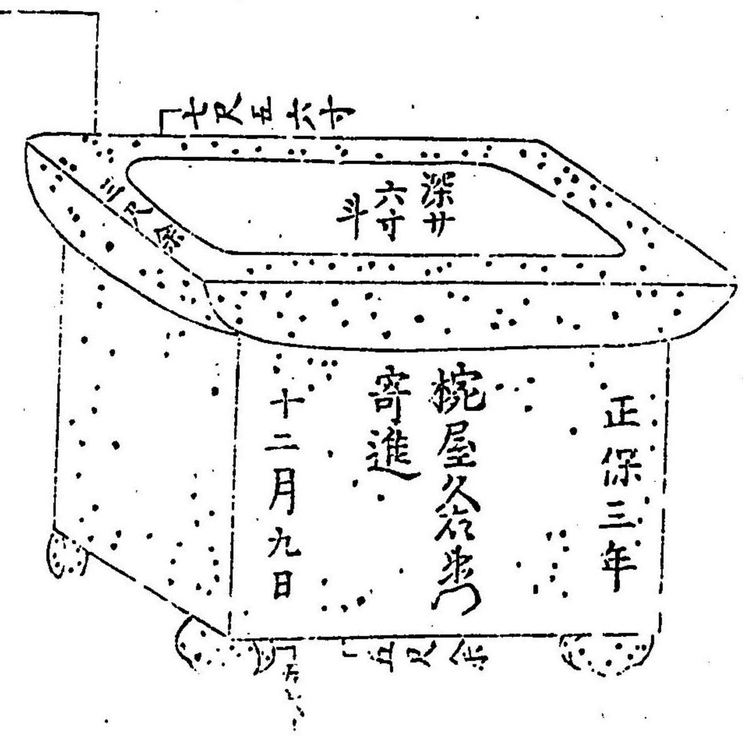
棹石高サ二尺余
ヨコ一尺臺石
高七八寸
大字
總高サ二尺八九寸

園水ハ西鶴が信友なり。西鶴沒して後。園水京より來り。七年その舊廬を
守れり。そのを西鶴名殘の友といふ草紙の序よ見へたり

追考　難波鶴に云。西鶴ハ井原氏庵ハ鑓屋町にあり。

〔九十二〕　椀久奉納の手水鉢

椀久が奉納の手水鉢は。大坂東門跡かけしよ書院の庭にあり。所縁あらざるものは見がたし。大坂の人もしらさるもの多かりしに去年杏花翁はじめて見出さる。これよりして人これをしりぬ。今書院普請最中あり。庭あれて手水



ダイ石ハ石づらみがき上の手水鉢ダイハとりまわりハ下の方常の石を敷くふろをあせり

鉢叢の中にあり。則ちこれを摺るに石面あらいしあれバ墨つかず。もんじおぼろけあり。もつともうらむべし

椀久が家は。京橋筋一説に大手筋にありしといふ。今その迹不詳。泉屋雨柳の話に。椀久が墓は大坂八丁目寺町實相寺本堂東南の方にあり。墓誌宗達之墓かくのごとし。延寶年中に沒しぬ。墓の傍に松ありといふ。予このことを大坂出立の朝きゝぬ。ゆゑに實相寺にたづねゆきてうつし來るを得ず。尤ら

らみとす。椀久はもと伊勢の人なり彼地にも椀久が墓ありと云

追考　曲三味線に云。卷之三六張目黒羽織の兩脇に翼ありて足は馬のごとくなる人々駕より出て一列に並居し中に少し勿体めきたる人は天和年中に女護の島え渡りしと聞へし一代男世之助とみへたり右は此津に名をのこせし椀久むらしの姿そのまゝむしやくしや天窓に立島の布子丸くけのひとへ帶革巾着のあきから懐に伊勢天目吸口あし

のきせるとろめんの沓足袋細緒の奈良ざうりかはらぬものは扇車の紋所今とても智恵のなささふる顔して坐せり下略これよて椀久が紋所しれたり○元日金蔵越（コガネントレコシ）といふ義太夫本よ。椀久とひやうたんかしくと玉屋庄七が事を混合して作れり。又小歌よつくりし椀久物狂ひいひやうたんかーくが事なり。

〔九十三〕 美濃屋三勝が墓　此條幷に夕霧が墓の事雨談よくわしけれバ省きぬ

〔九十四〕 遊女夕霧が墓

〔九十五〕 紙屋治兵衛が噂

紙屋治兵衛が墓ハ。大坂網島大長寺よあり。近日の大水よ。ふの大長寺決（キレ）口よあたり。墓所混亂して。或ハおー流し或ハ崩たり。故よ治兵衛が墓ハ見よゆかずしてやみぬ。治兵衛が家ハ今猶連續して大坂よありといふ。大坂今橋よ。今猶紙屋治兵衛といふ紙問屋あり。豪家なり。世よ今橋のねぢがねやしきといふ。

〔九十六〕 淀屋辰五郎奉納手水鉢の噂

淀屋辰五郎が奉納の手水鉢。天満天神の華表（トヽヰ）の傍よあるよし雨柳の話なり。予天満へ參りー日ハこの事をきらず。大坂出立の日よ聞ぬ。故よ終にうつし來らず。椀久が墓と辰五郎が奉納の手水鉢を見ざること。旅中の遺恨あり。この手水鉢のとその後大坂水津屋政五郎に消息ーて穿鑿せーよ。絶てなーといへり。水津屋ハ天満の人よて。神人ときたしく交れバ聞もらせーよハあるべからず

〔九十七〕 乞丐女六が墓　附評

千日寺の前往來のかたハらよハ。種々の墓あり。河豚をくらひて死ーたる四人のもの〻墓ハ。下よ石よて大なる河豚のかたちを彫刻し。その上に棹石を建て。四人の戒名をきるーたり。これらハ一時の戯よ似たれど。後人口腹を貪るのいましめにもなるべし。或ハ博徒の墓などよ獅子を

刻し。上よ棹石を建たる大造なる墓あり。うの外異形の墓あること江戸の回向院の如し。大坂ハ一体石よ富たる所なるゆゑ。石碑いづれも立派なり。

○同所に乞食女六といふものゝ墓あり。寶暦年中のことなり。此六といふ乞食ハ。頗る見識あるものよて奇人ありしとぞ。死後大坂の俠者あハれみて墓を建てやりしなり。うの墓數石二壇よて中壇よ戒名あり。上にハ石よて六がかたちを刻し。めんつうをもち酒樽のうへに立り。胸より上ハ欠て見へず。この六臨終よ偈を殘したるよし。一体心願ありて風狂人となれり。甚だ奇人なりけるよし。大坂の人かたれり。安達が原の淨瑠理本よ。六といふ乞食女酒をのむとあり。この六が事を書しものゝよし。六生涯さけをこのめり。

六が一代の像面白うけづくるを或人云酒徒このあの墓の石を粉ふりきのめば酒をすこしのむとよまさこと湯が墓ぢいしを粉ふりてのめば勞疾を治すといふ何人が言出しなん淫を伝ふるを伝ふるを俗家往来ぶくひく件の新風を示せり

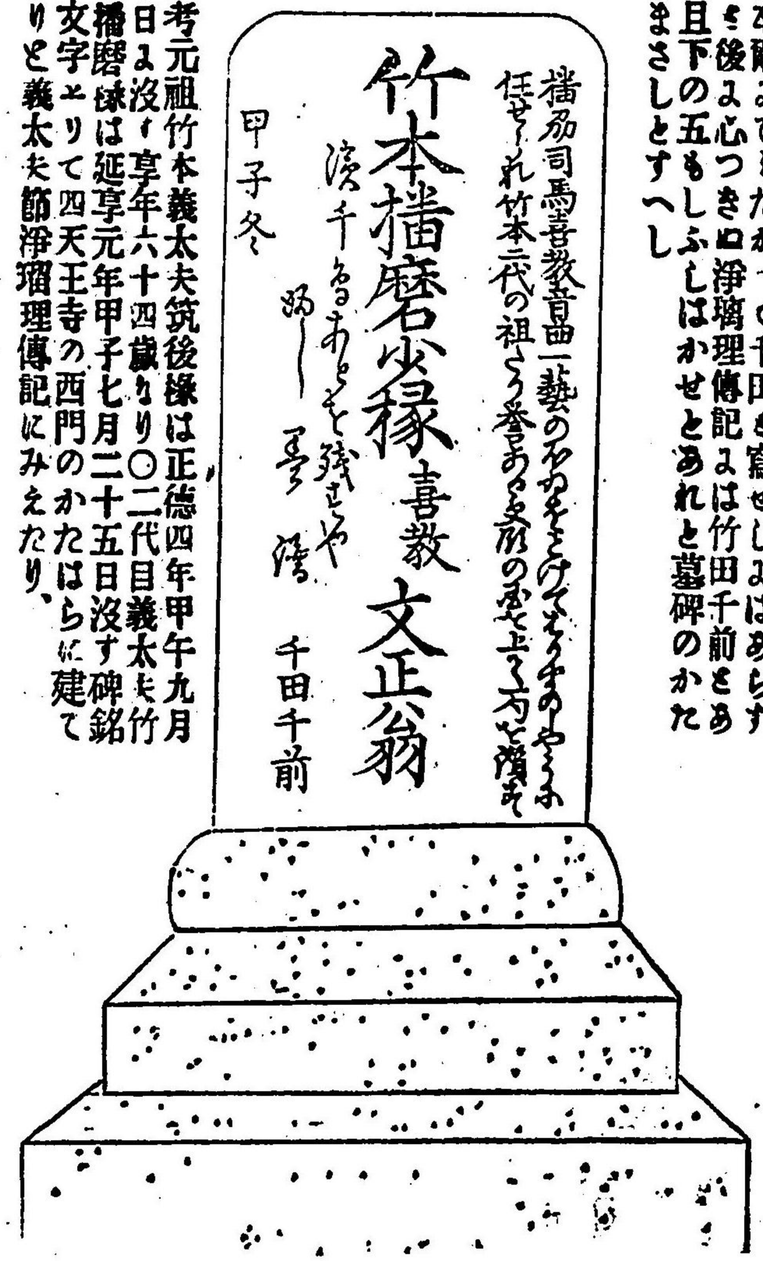
〔九十八〕 二代目義太夫が墓附元祖義太夫略傳

再考二代目義太夫と延享元年七月廿五日沒す甲子は則延享元年なり

又按ずるに義太夫節傳記によりて思ふに二代目義太夫が亡體は當時天王寺の西門邊の葬り其後法善寺へも右の碑を建たるべし

同所法善寺に竹本義太夫が墓あり。これハはじめ政太夫といふ二代目

追考千田千前は竹田出雲なり竹田とありーを五口本爾よてミたかーく千田と寫せしよはあらずやさ後に心つき口淨瑠璃傳記よりは竹田千前とあり且下の五もしふしはかせとあれと墓碑のかたをまさしとすへし



追考元祖竹本義太夫筑後掾は正德四年甲午九月十日に沒す享年六十四歳なり○二代目義太夫竹本播磨掾は延享元年甲子七月二十五日沒す碑銘の文字より四天王寺の西門のかたはらに建てありと義太夫節淨瑠理傳記にみえたり。

の義太夫なり。元祖義太夫が墓ハその所を失す二代目義太夫は寛延三年庚午九月沒す。この墓三回忌に建る所なり。

石碑の三方に片假名にて略傳をしるせり。長けれバうつし來らずの文中に元祖義太夫が傳を少しのせたり

○元祖竹本義太夫は。天王寺傍村の人。名は博敎。字は五郎兵衛号道喜淨瑠理の音曲を。井上播磨掾。清水の德屋利兵衛。京の宇治加賀に受け。その後一個の工夫を以て。はじめて一家の音曲をひらく。世に義太夫節と号す。これより末に二代目義太夫が傳あり

文中元祖義太夫が沒年なし。をしいかな。この墓の南の方に。並木正三が墓あり。碑面に南無參寶正三之墓とあり。これも高名の墓なり

羈旅漫錄卷の中終

坦庵居士正幹校

簑笠漁隱遺稿

〔九十九〕 契沖阿奢梨墓誌

契沖師の墓は。大坂餌さし町圓珠庵よあり。碑面よ

圓珠庵契沖阿奢梨之墓とのみありて。年月略傳等なし。傍らよ碑ありて。是は後よ水戸の安藤爲章の建し所なり。傳記大かた年山紀聞よ出る所よ仝し。故ようつし來らず

〔百〕 家隆卿の碑 附貞柳碑の噂

家隆卿の碑は。大阪新清水のうたゐら。田の畔少し高き所よ松あり。その下にあり近年安井の門主建たまふ所なり

同所新清水の下よ。鯛屋貞柳の碑あり。これも二十五回忌のとき門人の建てしものなり。いづれも後人の作ゆゑめづらしからずよりてうつし來らず

〔百一〕 元和戰死の古墳

七月晦日生玉明神。高津の社よ詣す。夫より一心寺にいたり。本多忠朝朝臣の墓よ謁す。墓の三方よ從者討死のもの十三四輩の墓あり。外は板よて搆ひて猥に人を入れず。この寺よ元和討死の石塔あまたあり。茶臼山の御陣跡。一心寺のかたはらよあり。小松おひ茂げれり。

〔百二〕 紹鷗が墓 附千家の墓の噂

泉州堺。南周寺よ紹鷗の墓あり。鍋代百錢を寺僧よ與ふれば則墓に謁せしむ。詣人墓前にむかへば。土中おのづから茶をたづる聲ありといふ。是は墓の後よ凹ある所ありて。それへ自然と風の吹入るゝなり。この寺よ利休をはじめ千家代々の墓あり。

〔百三〕 鬼貫が傳 附評 此條簑笠雨談に載たれば省く

契沖字は空心姓は下川氏父は名は元全善兵衛と稱す攝州尼崎城主青山幸利よ仕ふ寛永庚辰契沖尼崎よ生る元祿十四年正月寂す年六十二年山紀聞卷尾よ契沖行實あり

貞柳は大坂の人油煙商を號す八幡山の信海の門人にて俳諧狂歌に名高し享保十九年八月十五日沒す年八十一

寒守忠朝は二男なり元和元年大坂夏陣に從者二十余人と天王寺口よ向ひて戰死す年三十四紹鷗は堺

の氏光り武きり武ふれんりとらと野禪和禪みむ士永五て道云
人武の田てれ田てれ野よ詠氏と歌茶一と祿十沒を傳
姓田後ねの同ねばぞとけじを改參をを閑号元三す利ふ
源信なまじ末あ今なる自武む し好嗜居す年よ茶休と

〔百四〕 大坂市中の總評

大坂ハ眉毛なき女も。髪ハ多く島田なり。又島田にあらざるものハ。かた髷兩わげなり。かつ山ハまれなり。髪の圖前より見えたり

○大坂の市中茶店なし。渴そる人ハ途中茶よこまるなり。夜行するよもいこふべき茶店あきゆゑ。格別草臥るなり。川筋ハ船を岸に繫ぎおき。こゝよて酒肴を鬻ぐ。京の河原の涼よハおとれり。夜店ハ大かた提灯を出す。京ハかけ行燈なり

○七月廿八日。大坂御城の大手先を徘徊し。天滿天神に謁す。近日の大水に天滿橋天神ばし落て。難波橋より往來す。

○同日坐摩の社よ詣す。社地よ見せ物芝居茶店等あり。

○天王寺ハ大門のみ殘りて。一圓燒土のみ殘れり。天王寺の傍新清水より。遙に西海を眺望すれバ。左にかつらき山。金剛山。二丈が嶽。むかふよ聳へ

淡路島山はるかよ見ゆるなり。

○男子の髪の風ハ。ゑびしり髷多し。圖ハ前よ見えたり羽織ハ京よりも短し。

○新町橋の大さハ。江戸のおやぢ橋ほどもあるべし。この橋の上半分ハ商人よて或ハ房藥をうる見せ。或ハ煮つけ肴水菓子のたぐひをうるもの。おの〳〵やたい見せを出し。橋の上を眞半分よして。一ッハ商人のやたいよてふさげ。往來甚だ混雜すれども。惡言をいふものもあく口論もなし。大坂の市人、つねに風爐に釜などかけ。或ハ簡などふきて。万事高上に見するとこの地の一風なり

○順慶町の夜見世こそめさむるりざなれ。暮より四ッ時までハ十町餘両側ミな商人あり。故よかひ物にハ夜出る人多し。

○京も大坂も夜ルは。莚の上に古き手道具すべていろ〳〵の古器等を出し。ちいさき行燈を横よして。前へうつむけ火を黙す。夜中よかゝるみせいくらもあれど。喧嘩爭論なきゆゑよ。賊の愁もおきにや。これを夜み

せといふ。京は大和橋邊夜みせ多し

○新町の格子先にて古物みせをならべ。妓樓のミせ先よて櫛かんざしなどいろ〳〵の商人出るを。江戸人よはめつらし。

○大坂は食物の外。店うりといふをすくなし。故に商人の店など畫も障子をたてゝ。にく店多し。ミなおろし商ひ多き故なり。

○雪踏（ヒッタ）をうるものゝ穢（たた）多よて。橋詰〳〵に祇店（ヤタイミセ）あり。素人の店よ雪踏なミ。皮のつかざる女のうら附草履と。下駄足駄をうるミせは所々にあり。京もこれよ同じ

○堂島の朝市。これ又勢ひありてめさまし。

○一体大坂はちまたせまく俗地よてみべき所もあし。京の市中に水戸あし。大坂は一町〳〵よ水戸ありて。水戸の柱にふだをうちつけ。是へ町名をミるーにく。橋〳〵よも札ありてはしの名をしるしたり。橋に名をしるすをとふるし。木戸よ町名をしるすとは近ごろのをなりといふ

○大坂よて去かるべき神社は。坐摩。生玉。天滿。高津。等なり。天王と稲荷は所々よあり。稲荷も又神社去かるべくみゆるもの多ー。只天王寺と住よーのみ懐古の地なり。それも天王寺は去年の火災よ礎（いしずえ）のみ殘れり

○大坂よてよきもの三ツ。真貝（オホアキヒド）海魚　石塔　あしきもの三ツ　飲（カ）水（セ）　鰻鱺（ウナギ）　料理

うなぎは小串のミにて。京の若狹うあぎにおとれり。大庄といふ店。鰻鱺をうることおびたゞーかりしよし。今年故ありて店をミまひぬ。その外料理店數軒あれど江戸人の口よハあハず。うかむ瀬も盥梅（ちんばい）名ほどハ高からず

○大坂の市中犬猫すくなし。是ハ穢多主なき犬猫をつれゆき。皮を剝（ハク）ゆ

道書盧橘が著述度々書

ゐなり。犬子をうめば一兩月たちて穢多これをつれゆく。老犬は穢多をさりてこれをみれば大よ吼かゝりて。屠兒の手よのらず。故に小犬のうちつれゆくなり。主ある犬は捕ことをゆるさず。京よも犬猫すくなけれど大坂はいよ〳〵なくなし只夜行に犬糞のおそれなきのみ第一の好景なり。大坂の穢多村は江戸淺草の新町よりも大あり、家作りいづれも立派よ見ゆ、さかれども左右の棟をひとしくするをあたはず。一方は一尺くらねづゝみぢかし、凡十三間、川よのゝり居る大船つねよ八九艘、これみな穢多村交易の商船なりといふ

○大坂の人氣は。京都四分江戸六分なり。儉なることは京を學び。活なることは江戸にならふ。さかれども實氣あるとは。京にまされり。一體人氣のよく一致するところなり。これは土地のせまきゆゑなるべし。

○大坂は今人物なし。兼鼓堂一人のみ。是もこの春古人となりぬ。玉山が書は書肆のみ珍重して。雅人はこれを譏れり。又祖仙は猿の寫生をよくす。その外畫工などいくらもあれど京よ及ばず。盧橘といふ人は。筆耕とさせたれば後よは損を絶て行れず京ようつり住みて又大坂口縄坂よして賣卜せしが文化辛未ゆくへされずあるといふ

戲作をして。家内五人を養ふ。是も筆耕よ作者をかねて渡世よする人。大坂よ盧橘壹人なり。この人予逗留中大よ深切よもてあさる。戲作のみをもて妻子を養ふを。廣き江戸よさへなければ。大坂は書肆の富る地なるとこれよてさるべし。

○大坂は賣藥店多し。首より上の妙藥。腰より下の妙藥などいふ招牌を出しをく見世いくらもあり。

○大坂は時を太皷よてうつなり。所よりて夜の五ツは五ツ半頃ようつなり。是は御城の太皷を聞く段々ようつ故。遠き町は次第よ時がおくれるなり。新町は夜九ツよりうつ。是は大太皷なり。江戸吉原にてひけ四ツといふを。新町にては太皷まで。太皷より後などゝいふ。但し新町の九ツは世間の八ツなり。

○天王寺の地中に。雁金文七が奉納の繪馬八しま合戰の圖あるよし聞しゆゑ

人にたづぬるよ。去年天王寺の燒失の時紛失して今ハなしといふ。盧橘が話よ。實ハ文七が奉納の繪馬にあらず。名前別よて餘人の奉納せしものゝありといへり。

〔百五〕 難波雀の抄書 附西鶴名殘の友

難波雀 廷寶七己未陽月下旬吉 備國水雲子著 小本一冊 俳諧師所付の部に

一天滿碁盤屋町 西山梅花翁 一鎗屋町 井原西鶴

歌學者の部よ 一江戸堀 下河邊長流

又屋敷名代の部に 一細川越中守殿 名代 天野屋利兵衛 甚だ珍書

あり。大坂よて見たり。予も名古屋よて。諸買物三合集覽といふ小本を得たり。元祿五年の版なりそのをもむき難波雀よ似たり

○西鶴沒後。信友圓水京師より來り。七年その庵を守る。西鶴名殘の友 合本五冊 西鶴草稿のまゝ出板す。その事圓水が序文に見ゆ。俳諧師の傳をおかしく書たるものなり。田宮氏所藏なりしを予よおくる。

○長堀銅吹所いつみや所望卽席

又たくひよよあらかねの吹革もてふくてふ富貴を家よ傳へよ

〔百六〕 住吉 附難波屋の松小町茶屋

八月三日夜前より雨ふりけるが晝よりやみぬ。いざや住よしへ詣んとて。書肆大野木氏やゝた船を用意して大坂にてやかた船と稱するも予をいざなひ。心齋橋より乘出して。江戸のやかたぶねよりなり住吉明神へ參詣す。はるかに住吉の濱よりみれば。武庫山右よ遠く聳へ。淡路島むかふにかすみ。一の谷などはるかにみゆ。岸の姫松は數百本千とせの綠をあらはし。四社の御神上久て尊く。社前のそり橋。角柱の石の鳥居。同石の舞臺。誕生石。その外攝社を巡拜す。淺澤の杜若。車かへしの櫻はなハなけれどその跡をたづね。御田の稻は育みていまだ花をむすばず。神宮寺奥の天神悉く拜し畢て。酒樓

伊丹屋よ酒食をとゝなふ。

よの中を何かうらみん難波かたこゝ住よしの岸よあそへは

此邊に竹本住太夫が出しといふ家。伊丹屋の二三軒手前よあり夫より難波屋の松見にゆきけり。社より西の方三町ばかりよあり。茶店の庭木なり。つくり木ふがら。四方二十軒ばかりまんまるに笠の如く茂生す。木の高サ一丈といへど。みれば五六尺あるをくひきくみゆ。へりよ至りては三尺。或ハ二尺余はあれたる所あり。こゝよてあづき餅をうり。又松のかたちを紙にすりてうるなり。

○とゝやせんべいは。江戸よていふふきよせあり。かるやきの猶あ此邊ころ〳〵やといふみせよて。このせんべいと竹馬ととうる。本家のとゝやハ堺にあり。はきものなり

○社前の西北の角よ。小町茶屋といふあり。尋常の茶店なり。この茶店よ

かぎり。長き柄杓のうへよ茶碗とのせて茶を出すなり。

小町茶屋誰がうらみより秋の雨

歸路も船なりければ。天下茶屋へはゆかず。この日ふりみ降らずみ〜て日くれぬ。あはたゞしく舟よのり。ながれに沂れば船おそし。左右の岸邊よ鈴むしのすだく聲〳〵聞ながら。こがれもくも。又一佳興なり。前だれ島にて伽やらふの船よあひぬ。前内裏島なるを。俗ハ前だれ島といふ。伽やらふハ舟まんぢうなり。土地の人ハぴんぢよといふ

その夜九ツころよ。船心齋橋につきぬ。この日船中秋暑をわすれ。いと興ありて覺ぬ。

〔百七〕 松明の施行

大坂ハつねに河水を飲水とする所なるよ。近日近江の大水よ河水濁りて飲むよたへず。故よ大坂のもの今道村增井の清水。うの外天王寺邊の

井戸の水を汲みよゆくもの。夕方より引もきらず今道邊の人家の前に。夜は大挑灯を出し田の畔には松明をともし。夜中水を汲ものゝ助けとす。すべて大坂は氣がさなる所にて。まけじたましひの商賈等。大水よりて落たる小橋は。官府へねがふて。自身一個の入用にて。假橋をかけ。無錢と書し挑灯など出しおく。かやうのを何によらず。人々きそひてなすをあり。

〔百八〕 浪華妓院の巻

大坂の妓樓は。新町と。島の内。曾根崎。よろしく見ゆ。島の内は見せ付あり。新町は見せ付あり。太夫天神は見せをはらず。鹿子位と稱するものはみな見せをはる。天神にも見せ天神として。見せをはるものあれど。是は下品なり見せの格子も麁末にて。間口三四間よりすぎず。妓も十人より多からず。見せをとる妓は。ちひさき蒲團を敷て居る。又すこし腰かけをして。居せいを高く見せるもあり。衣

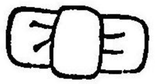
澤標は大坂新町の細見記なり寛政十年再版す

類は絽のもやうが多し。帶はひちりめんの長ゞきなり。店先は老婆或は了髪つき居て客の袖をひく。天神のある見せは。天神見せとて別あり。

○凡揚屋の廣く奇麗なること大坂は長くものなし。揚屋は九軒は限る。

りの餘は茶屋と呼屋なり。みをつくしにくわしけれどこゝに略せり。新町は三方は口ありて往來ゆきぬけなり

〔百九ノ上〕 太夫天神のかし借り

太夫天神は夏も如此横に長く結ぶなり。つまは右の方へきりゝ小袖なり。帶は  と廻してとるなり。新町は太夫天神をかりて見るといふことあり。京の島原又は大坂揚屋よりかりにやれば。客ある妓も必來る。太夫は引舟女郎のつきてくるもあり。天神は禿の十二三歳ばかりなるが。麁服のまゝよりて。おの〳〵一人は一人づゝ付そひ來る。客は席の正面に坐す。末社は左右に列す。扨赤前垂の仲居のこゝろさゝたるもの

一人盃臺よ盃をのせ坐しきの入口より一二間あなたよひかへ居る。又その向ふよ一人硯と紙をもちてひかへ居る。是ハ太夫天神の名をよるすなりさて太夫よても天神にても。おの〳〵坐敷の障子の外にイむ時。かれ禿誰さんかへと妓の名をよぶ。その時仲居かしておくれといふ。いづれも一調子聲高一時よ太夫よと〳〵と立出。盃臺の前よたち。臺よつきあたるほどなり うちかけの中程を。右の方帶の結目の下へかいこみ居りながら。左りの裾を折て左りの方へ一尺ばかり寄てはすよすれる。この時仲居かの盃臺を太夫の前えつとおしつけ何屋の誰さんと高聲よよぶなり。うの時太夫よとやかに盃をとりあげ。客の方を見て。持たる盃をぱつたりと臺の上えおく。仲居その盃臺を一尺ばかりつと客の方へおしやり。又高聲に誰さんと妓の名をよび。臺をもとの所におく時。太夫つとたちてかへる。その所作至ッてよとやかなるものなり。何人にても所作みな同じ。天神もまたかくのごと

ー。但太夫と天神と一所よハかりず。天神をかりてみる時ハ天神ばかりなり。扨かりたる太夫一旦のことすず歸りて後。書留たる名前を見て。よぶべき太夫を名ざしてやれバ。客あるものハ來らず。客あけれバ程なく來るなり。

○太夫天神ハ夏も小袖うちかけなり。繻子或ハ綾などの縫あるうちかけ二ッ三ッ着て出る。帶ハ金襴天鵞絨おの〳〵差あり。天神ハ江戸吉原の坐敷もち位のものなり。中よハ縮緬の襠よたるもあり。又顔色も一樣よハあらず。呼びむかへて坐鋪よ來れば。直よ客のうしろよ坐す。床よ入るまで了髪付そひ居て。或ハあふぎ或ハたばこをつけ。左右の用事を悉なす。江戸の妓ハ客のむかふへすれば。この里の妓ハ客のうしろへすハる。ゆゑに席上よて顔色をみることなし。扨閨房よ入れバ。件の衣服を着かへ。越後ちゞみ。或ハちりめんの單物など。夏の衣服よなりて臥す。凡房中よごきの帶をよめて寢るもの。太夫と天神のみ。よど

きハ浅黄ちりめん羽織ありその餘伯人といへども房中帶おし。賤妓ハ丸裸(まるはだか)よして臥す。是衣服をいとふ故あり。いと興さめておぼふ。

〔百九ノ下〕 伯人の評

島の内の伯人ハ。太夫ほどよハあらねど頗美なり。衣服ハすきやちゞみあどあり。繻半を着す。帶ハ妓も歌妓も黒天鵞絨が多し。大かた京の祇園に似たり。

○島の内の伯人。道頓堀の茶屋ゐどよ來りて客と臥し。翌朝歸るよハ。必むかひの駕來てこの駕よのりて歸る。是ハ朝開(アサナ)にハ寢起のまゝなる姿を人よ見せじとて。いづれも駕よのるといふ。或ハ私窠(カクシベイボロ)ゆゑ公とはゞかるともいへり。その道僅三四町の間を。妓の駕にのりて歸るを又めづらし。京よてもかゝるとハなし。

○道頓堀の茶屋よも高卑ありて。大樓ハ島の内の妓もよび。小樓ハ

坂町の。妓をよぶあり。但し小樓ハ島の内の妓を呼れぬといふよハあらねど大かたハかくのごとし。是客の尊卑による故よや。

〔百十〕 俳優作街(ナスゲンヅレ)

大坂よてハ役者もげい子おやまを抱(かゝ)へき。これを他の茶屋に預けおき。その花を得て活計とするもの多し。兵太郎ゐどといふ役者ハ。どみのといふ妓をかゝへれき。坂町へ出しれくあり。ゑれるものハ兵太郎が抱の富野と名ざしてやるとそ。是芝居と妓樓と軒(ノキ)をならべ居る故あるべし

〔百十一〕 難波(なんば)新地

難波新地ハ。左右六筋の街(ナヤマチ)悉(ノ)妓樓あり。數百軒あるべし。夜ハかけ行燈を軒(ノキ)よ出し。甚だよぎはへり。大かた京の二條新地に似たり。いづれも賤妓なり。

〔百十二〕 難波堀江 附堀江さし紙

難波ほり江の妓樓ハ。坂町よ似て新地にハおとれり。坂町よハ見せ付あり
ハ。いづれも京の祇園のをし。但圏點山がたハあし

堀江さし紙

今年流行
新造後帯　一ざ
二ざ

よ彩連

今年流行
新造前帯　一ざ
紀産

河とも

せんこう一本を六分と定め、四本たちて花一ッ貳匁四分也、これを一座といふ、四ッとまり、期とまりと、花のさだめあり、顔色美なる妓ハさだめの外せんこう一本半よけいあたひをますあり、ゆゑに一本附といふ、又時妓ハ一座切の客へハ出ず、ゆゑに二座とをはるあり。かどのよ新河などをるせしハ見せなり、下ハ妓の名あり、新造とハ年少にあらず、はじめてその地ハいつるを、みゐ新造といふ

○新町ハ一わり引。揚屋ハろうそく一挺壹匁五分。その餘ハ二わり引あり。大かた京よりおゐし。

○島の内。曾根崎。難波堀江。難波新地。阪町。せうまん。尼寺。等れのく高下あれど。おもむきハ大かたおなじ。但し新町の外ハみゐ私窠なり。

〔百十三〕　大坂妓院の方言

妓の言語ハ。京も大坂も大同小異なり。大坂ハ言語すこ〜京よりさつぱりと云たる方なり。ゐといふことゝ。いつこうといふとを京ほどハいはず。來たをを。おでまーあされた。「すゐーを。ちつくり。「客のかへる時よ。妓ようおこしなされまし。などいふハ京とハ異なり。又江戸よて。「武左といふを。大坂にてハもさといふ。「廓の牽頭を判官といふ。略〜てぐわんとばかりもいふ。「おか場所の牽頭を。辨慶といふ。「女のかたより情をよせて男をひくを。おき錢といふ。「きつを。ろくどといふ。「あないちを。あなうちと

いふ。「人の妻を。ごつさんといふ。この外いくらもあるべし。大かた京より似たる言語おほし。

〔百十四〕 女子の評

京も大坂も女ハ丸顔多し。京ハ痩かたちよて。大坂ハ少し骨ぶとなり。顔色の美惡にいたりてハ。京まされり。

〔百十五〕 堀江の藝子

ほり江い元げい子のよき所ありといふ。今ハ云からず。三絃箱のかたちその外大かた京のごとし。但大坂よてハいろぬりの三絃箱もあり。堀江のげい子。三絃箱のうらに歌をるーてよといひければ

音よきく君が名こその瀧つせよひあや三筋のいとゝおもしろ

〔百十六〕 妓樓混雜劇

大坂よて芝居を妓樓と打混じたる所ハ。道頓堀と。難波堀江と。北の新地

なり。この内道頓堀尤よさはへり。

〔百十七ノ上〕 浪速のめりやす

大阪よて歌妓おど。もつぱらうたふうたをめりやすといふ。京にてもこれをうたへど大阪よ及ず。節は江戸の河東に琴歌をまじへたるようなるものよて。煩手にわらず節甚だゆるやかなり。秋雨秋雨のをりしもわれいろそふる萩の花。遠くそつねのかからころも。つまこふ鹿大かたこの一こゑ。ふろもおごりの後いりに。をさらよたのしづけさてよはよて。章も雅なり。折〳〵新めりやすのひろめあり。尾州三州にてはこれを大阪うたと稱す。又三十一もじの歌よ。節をつけてうたふもありすべて一箱おらざるものをはうたといふ。又別にさはぎうたあり是は曲も煩手おり。しかれども江戸のさはきよは似ず。

〔百十七ノ下〕 幇間 京もならべ評も

京も大阪も幇間は。一席するよ堪ざるものあり。幇間は羽織を着ず。島の

内の幇間に音八といふものあり。これは狂文發句など少しくできるなり。又新町に亦助といふ幇間あり。噺をよくせ。その外は無藝大食甚だいやあるものなり。京の牽頭は、四條河原あたよ、網をはりねて客を引くなり、かくせざれば客おしといふ。牽頭の出るミせは牽頭ばかりなり、祇園はべして牽頭もちれこなはれず、また男げいしやといふものなし皆悉く幇間なり、

〔百十八〕　首信が傳

大阪島の内に信といふ藝子あり。人渾名して首のぶといふ。そのこゝろえ。顔色絶麗。うの首艶美なるを以てなり。今婦人の品定よ首がよい首がわるいといふも。このぶよりはじまれりとぞ。行年四拾餘歳。大阪雨柳の話よ、のぶ寶暦十一巳年ようまれ、今享和二壬戌にいたりて、四十三歳なりといふ、云かれども猶二十五六歳よ見ゆ。實よ人妖なり。その朝開よ紅粉をほどこさゞる顔色却て美なり。父は御所櫻長兵衛といひ一角力とりよて。後角力年寄になれり。のぶ安永のはじめげい子となりて京祇園よあり。全盛類なし。豪富の人これが爲よ金

錢を投うつを夥し。こゝよ豪富三井氏ひそかよのぶよ懸想して。數万金を費せり。世よいのぶに十万兩の金を費せしといふ。こゝよ於て。三井の親戚及主管等大よ驚き。忽主人と伊勢松阪の店よ蟄居せしめ。年中の雜費僅百金を限りてこれと合力し。親戚悉義絶す。この時のぶは京にとゞまるべかりしを。自おもへらく。富る日ハ樂を共よし。その窮するに至りて。離別せんも義にあらずと。強て松阪よ至り。情郎よ給仕すること十三年あり。のぶよくつかへ。且まつ阪にあるの間。本居の弟子となり。をり〳〵源氏など聞。また機織ることを學び得たり。或日主管等商議して。密にのぶにいへらく。そこの實情十三年の苦勞。餘の婦人の及ふ所よあらず。云かれども其許のこゝよあらん限りは。諸親の憤り解けず。主人ふたゝび世をひろくすることあたはず。しかれども主人はそこの深情よひかれ。寵おとろふるの日あければ。みづから放ちやることあたはず。もし主君をおもふ實情あら

べ。みづから請ふて京え歸れといふ。のぶ主君の爲よ敢て爭はず。遂に京
よ歸らんことを請ふ。諸親密によろこび。種々の手道具等をあたへ。旅費
を用意して京に歸へらしむ。のぶ京に歸りて手道具を賣り拂ひ。七十餘
金を以て櫛笄等をとゝのへ。別よ衣服を製して。ふたゝび。祇園に出て歌
妓をなすよ。全盛むかしよりまされり。そのゝち俳優嵐雛助。後嵐小六と改む。江戸よて死
したる雛助が父あり。密よのぶよ通じて情好尤厚し。世上評判只この一事よあり。
こゝに角力とり五七輩。御所櫻が弟子あり商議して。御所櫻が家に到りていへら
く。ほのかよきく師の女雛助が妾となれりと。師いかなれば女を俳優の
妾となし。利欲の爲に身をけがさしめ給ふぞ。もし如此ならば吾儕師弟
の約をかへすべしといふ。御所櫻これを聞て大に迷惑し。この事をのぶ
にかたりて離別せよといふ。のぶ又これを雛助に告ぐ。雛助云。角力と俳
優と尊卑何程かおとれる。遂みづから涙人をたつるものといへども。元

殘をとりて人のものとなるよりはたりてハ共におなじ。又俳優もむか
しハ禁裏よめされ。公儀の上覽をへたるとあれば。由緒を論ずるにいた
りて更に高下なし。吾も又身よかへてものぶをかへさじといふ。こゝよ
於て爭論止ず。のぶおもへらく。究竟家父角力中よあればこそ。かゝるよ
からぬとも出來ぬ。殊よ父年老たり。隱居せしめんよハとて。京よて去か
るべき家をもとめ。もたかよ老を養ハしむ。爰よおゐて御所櫻角力を辭
して隱居す。よつてあらそひ頓よ辭ぬ。その後雛助病死して。のぶ寡となる
れり。歌妓をゐすを元のとし。程なく俳優文七(吉男)よおもハれ。遂に文七
が妻となる。いく程ゐく文七病にかゝりて危く治療去るしなゝ。のぶ夫
の爲よ立願して。みづから髮をきりて讃岐國金毘羅に參詣す。のぶいま
だ歸らず。文七家よ病死す。その頃涙花人の諺よ。家に千金をつむとも首
落す是より後のぶ又ふたゝび嫁せず。大坂島の内よ出て歌妓をなす。今に

全盛なり。のぶすこし和歌をよゝ。又俳諧の遠歌を嗜めり。予大坂よ遊びし日。一夕道頓堀の竹亭よのぶと會す。のぶ來りて席よ着と。うのまゝ予が名を呼て言語舊知の如し。餘の哥妓幇間等先え來れるものも。いまだ予をしらざるものあり。のぶ問はずしてもやくその名を知るあやしむべし。席上の嫖客のぶに發句をもとむ。のぶ再三辞して後

わらはれて夜をひた啼やきりゝす　のぶ

かくしたゝめて出しぬ。手跡も又拙からず。のぶ予に扇面を請ふことい と深切なり。則狂文一篇と狂歌一首をしるしてとらせぬ。諸客興よ入て。席中の哥妓幇間みな即興の發句を作る。又予に文をこひ歌を請ふもの多し。四更よしてはじめてやむ。

ひらく手のおくやもゝしき女郎花　哥妓　ふさ

聞たまへ鶴井のめぬも千々の秋　同　しけ

一ふしに虫の音しんとふけにける　牽頭　書八

この外席上の嫖客雨窓。國瑞。盧橘等即興の發句あり略す。

〔百十九〕　吾雀が噂附幇間亦助が噂

大阪新町ひやうたん町の茶屋。松雄屋伊右衛門は。吾雀と號し俳諧をよくせり。手迹も又拙からず。元トは醫家の子よて後よ幇間をゐしけるが。近ごろなりいで、茶屋となりぬ。茶やは揚屋につぐものなり。吾雀妓院中の人よ似ず。至極見識あるものあり。予一夕盧橘にいざなはれて吾雀を訪ふ。主人大よよろこびて長夜の飲をなす。予に歌をこひければ。

なよはかたゐよ波雀に宿かしてねよけなるへー里の川竹

又同所に亦助といふ牽頭あり。元とハ加賀の人なるよ。この亦助書をよくす。吾雀よびむかへて予よ謁せしめ。席書をゐさ。亦助席上に筆をとる筆意甚だ妙なり。予に贊をこふ。吾雀も又これよ贊す。この亦助至

極柔和よして。幇間のをくならず。みづから足齋衛之と號す。但文事ハなき人とみゆ。亦助みづから新町橋のもとよ俠者(フトコダテ)のたゞずみ居るかたを畫て。予よ讃をこひければ。

ちよとそこへ橋詰までハ來てたもれ雲の出入の秋の月影

芋の畫よ　煮ーめてハしほみつ玉や皿の芋　吾雀

太夫の畫に　おもくおくこころもつの裾も夜寒かゐ　仝

すゝきの畫よ　化ものゝはなしは消て野分哉

大阪の妓院中。この者二人と。南ののぶと。音八のみ。少しく風流ありてみゆ。京よてかゝる徒に風流あるものをみざりし。

〔百二十〕　總嫁

總嫁は。今道村の田のくろに出るものは。紅粉をゐどこさず。さながら素人のをくみゆ。いづれも醜婦なり。しかれども病疲の者よはあらず。又西

横堀の材木のかげよ出るものは。いづれもよそほひて美なるものあり。らしく六三がくびれし所。かの材木のある所なりと。ある夜夜行のかへりよ。友人指さーてゝたれり。大阪の惣嫁は小屋なし大かた江戸のをし

〔百廿一〕　とぎやらふ

大阪よて舟まんぢうを伽やらふといふ。土地の俗はぴんしよとよびなせり。毎夜船を前だれ島。うの外元船のかゝり居るあたりよこぎわりき。伽やらふとよぶなり。則元船へよび入れて船頭のあそびものとなすとぞ。とぎやらふとは。閨の伽をやるべしといふの義なり。元船の船人これをよび入れてみる時。かのぴんしーよ立膝をー。前をあらはにして客よみせーむ。是その陰中瘡毒なきをさめすの意ありといふ。予これを聞て暫時蜜飯す。

〔百廿二〕　妾奉公人引札の噂

大坂よて先年。めゝけ奉公人の引札をせしものありと聞し故。これを大坂の人よたづぬるに。その砌官より御ぉゝりを請て。そのをやみぬ。わづかの間あれば。今ハその引札をもちたるものもなしといへり。かやうのものを後よ見れば。何となくをかしきものあり。

〔百廿三〕 京大坂商家の評

京も大坂も。妓楼の夜具ハ甚麁末なり。太夫天神伯人といへども。郡内縞の蒲團一ッに過ぎず。是夜具ハみなうの茶屋より出す故なり。伊勢古市邊またかくの如し大坂ハ京ほど遊歴の旅客なし。ぉかれども街頭悉〻妓楼にて。又悉〻繁昌す。大坂ハ一體金銀ゆづうよき地よて。商家の小厮（こまの）といへども。自分のたたらきを以て商ひの利を得るとあり。畫ハ業用よゆだんあく寸暇あるものなし。夜ハ五ッより後。商家の主從みな徒然あり。ゆゑよ一日の辛勞を忘れんためよ。妓楼よ至りて酒もり遊べり。商家の奉公人も。自分一

個の商ひにて得たる所の金錢を費し。敢て主人の財をかすめるよあらざれば。主人も強てこれをいましめず。ゆゑよ妓楼おのづから繁昌なり。京ハぉからず。呉服物など商ふものことゝく女あり。これを牙婆（スライ）といふ。この牙婆反物をぜれひて旅館に來り商ひをなす。女子ハ反物をとり扱ふよも。手先和らかよして反物損するとなく。言語ぉとやかよして。價を論ずるよ至りても一個の才覺なく。萬事主人の意をうけてこれをうる故。却て客の買ふべからざるものも賣るとあり。又金銀をとり扱ふにおよんで私すくなし。男子ハ出商ひをするもの必ず私多し。是れ十字街頭悉〻妓楼ある故なり。こゝをもて。出商ひをなすものは悉く女子なり。京と大阪の商家。こゝろを用ゆるの才覺。大小あることかくの如し

〔百廿四〕 道頓堀（どうとんぼり）の芝居

大阪ハ洪水後にして。芝居いまだはじまらず。道頓堀の大芝居は問口京

の芝居よりもひろし。うの中芝居なども。大芝居のごときものあり。わやつりと中芝居は興行せり。八月初旬よいたりて。道頓堀角の芝居に看板あがる。淺尾爲十郎。藤川八蔵。大谷友右衛門。中山一德。友吉あどみえたり。八月十五日ころ初日ならんといへり。

○道頓堀の芝居よりては。江戸よりて川こしと稱するものみな茶やの下女なり。見物の人と見れば走りよりて。コレ一ト幕見さんせんかといふて袖をひく。

○すべて上方の芝居ハ。幕の間の太鼓ハ半鐘をまぜてうつなり。口上いひハ幕際より三尺ばかり外。花道へ出て役割をよみ上る。尤ものろく聞よくし。口上をはりても幕はしばらく明けず。この間大に拍子ぬけのしたるものなり。

○大坂ハもけて棧敷の高料なる所よて。あたり芝居に至りては增しと

いふことあり。たとへば二貫二百文の棧敷へ。四貫文の增をかけて。都合六貫二百文とる。京よも增しあれども大坂程よハあらず。その餘ハ京も大坂もかはることあし。妓と雜劇と食物と。江戸尤下直なり。

○大坂の中芝居の役者ハ限りて。返詞をするハハィ〳〵といふ故に素人よてもハィ〳〵と返詞をするものを。小芝居出といふて笑ふなり。

○遊女の短尺。すべての書物ハ。紋所の印をなすを尊ぶ八千代はしめてこれをなせしよし。箕山が大鏡に見ゆ。

〔百廿五〕伏見の夜泊

八月五日七ッ時ころ大坂を出立。船にて伏見へ登る。今日浪花の友人盧橘、國瑞、蓉坊、さゝ山、和尙、雨窓、蜀人、大野木等、送行の盃をかたむく。今夜風雨淀よて

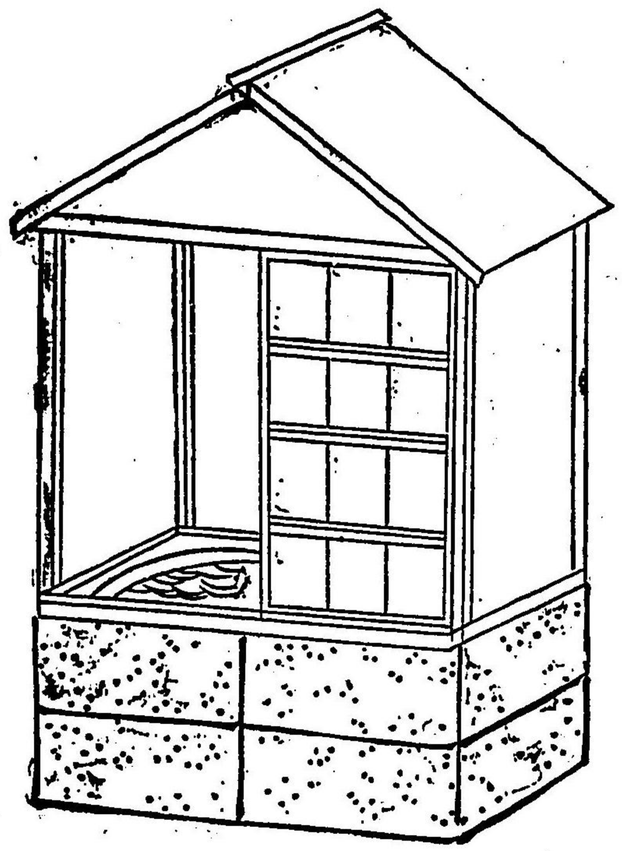
舟子等かむねかきあハす簑のうへにぶりそゝく雨の綱もくるしも

六日朝五ッ時ころよ船伏見よ着きぬ。今朝ます〳〵大風雨。六月の洪水よこりて大津へ出てず。直に京にゆきて晴をまつ。八日に京を立て水口よ泊る。今日大津邊所々洪水の跡を見て駭然たり。

○八月六日の大風雨よ伏見より大坂の間又々出水。近日築直せし堤をおし流し。八軒屋邊六月廿九日の水よりも水高きを一倍すといふ。この日大阪の小橋三ッばかりおちたりよりて五六日大坂へ舟往來なし。予ハ幸よ五日に大坂をたちける故路次の愁なし。此節石藥師庄野の間また〳〵大水。はし落て五七日往來なし。予ハ關より伊勢街道を經て。九日の夜津よ泊る。津よ兵丹屋といふ旅宿あり。參宮の旅人津よとまるものハかならずこの兵丹屋よ來るゆゑよ甚だ繁昌せり。

〔百廿六〕 伊勢路の居風爐　是より伊勢及歸路の話をおるす

伊勢路の居風爐ハ大かた戸棚あり。そのかたち圖のごとし。上ハはぶがたなくして箱の如きもあり。



此ふろのうちに柄のみぢかきひしやくあり。これにてかさへをかけるなり。尾州三州などの人ハこれを嫌ふ。是死人の入棺よ似たるといふ俗忌なり

下ハ石よたたみあげ、湯あさくして一尺よ足らず